

福津市	宗像市
人口	人口
66,923人	97,148人
(2020年8月推計)	(2020年8月推計)
面積	面積
53km ²	120km ²



ちよつとよりみち 唐津街道むなかた

人のくに、美のくに九州 (日本風景街道Q - ⑤)



① 許斐山からみた四塚連山（湯川山、孔大寺山、金山、城山）方面

次

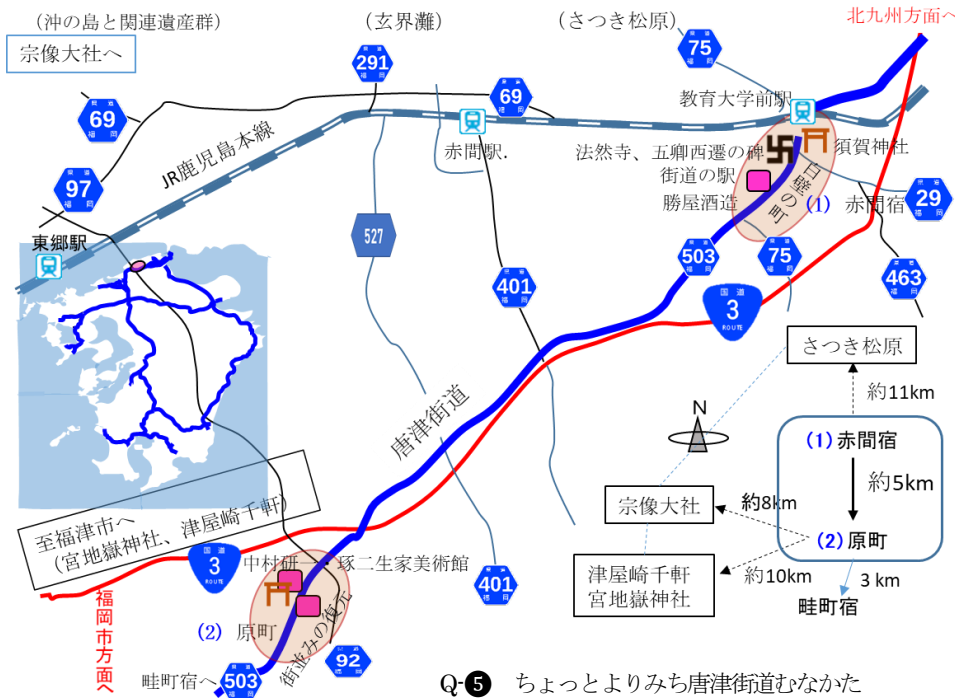
[illegible]

はじめに

宗像市における風景街道の活動は2007年に始まった。当初は、かつての原町宿(宗像市)を訪れ、そのまわりの環境整備やまちおこしの成果を訪ねることを内容としたが、後に赤間宿(宗像市)を加え、両宿場間の約5kmに拡大された。さらに、最近では隣接する畦町宿(福津市)との活動の連携がある。

江戸、明治、大正、昭和と賑わいを見せた唐津街道沿線の宿場まちに残る古い街並みが対象である。その遺跡や古民家の保存と再生をテーマとし、ちよっとだけ寄り道し巡るとの意味を込めて「ちよっとよりみち唐津街道むなかた」と名づけ、来訪者を受け入れる活動である。

そこに降って湧いたのが、2017年7月、ユネスコの世界遺産として、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群」が登録されたことである。これは宗像市と福津市の両市にまたがるかつての宗像郡(以下むなかた地域と呼ぶ)全体を舞台にしたわが国の古代の出来事や神道信仰に関わる遺産とその物語である。当然ながら、むなかた地域を訪れる人々は、この世界遺産に強い関心がある。



一方、地域の人々にとっては、古代から現代へと長期に及ぶ宗像大社の信仰を支え、大切に守り、発展させてきたとの自負がある。神社・氏子、あるいは領主・領民といった個別のつながりにこだわらないものがある。これらの意味で、地域の立場からすれば、来訪者が宗像大社をお参りすると共に、その背後にあったむなかたの人々の暮らしなす唐津街道の街並みを訪ねることで、宗像大社への理解を一層深めることを期待している。

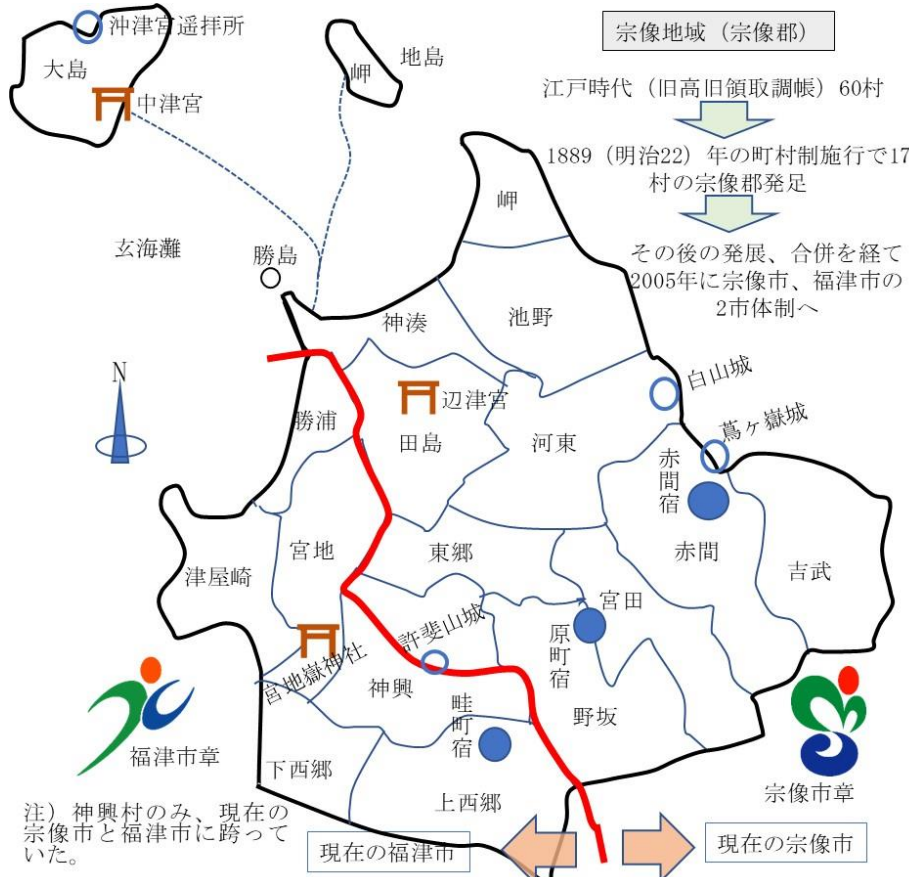


図1 町村制施行時(1889年)におけるむなかた地域(宗像郡)の村の構成

び、内容もむなかたの文化や暮らしへと拡大している。

もともと宗像市および福津市は、玄界灘に面し、九州で唯一一つの神郡・宗像としての特色ある文化圏を形成してきた。そのよりどころがいまなお継承される宗像大社の存在であり、古代官道、唐津街道などを往来してきた地域の形成と発展である（一口メモ①参照）。このため、むなかた地域の風景街道を考えるには、両者の歩みとつながりは無視できない。むしろそのことが主にならざるをえないといえる。

本ガイドブックの作成に当たり、その範囲と内容が問われるが、前述を踏まえ主要な地域資源を連ねれば、玄界灘に面する自然環境、宗像大社関連、唐津街道関連、およびこれら以外の地域資源となる（図2）。しかし、そうした諸事項は互いが関係し、むなかた地域を一纏めにする自然や風景、歴史遺産をなし、暮らしや海の安全を願いつつわが国における神道の形成、文化の発展に寄与してきた固有のものがある。

そこで、まずは、むなかた地域の全体を包括する信仰と文化を紡いだ宗像大社とその関連事項について、神郡「宗像」の全景と題し概説する（一章）。その上で、むなかた地域発展の原動力としてその基盤をなした唐津街道と、その拠点となり歴史を見届け、現代に貴重な情報を橋渡しする三つの宿場まち巡りについて記述する（二、三章）。そして最後に、前章までで扱いきれなかった玄界灘沿岸域に関わるまちの物語や神社・歴史・自然を補完し紹介するものである（四章）。

むなかた地域の地勢について

前述したように、宗像市と福津市は、古代からの九州唯一一つの神郡である。市政施行までは宗像郡の一つにまとまり、むなかた地域と呼ばれた。江戸時代末期、集落単位といってもよいほど小さな60の村々の集まりをなすほどに発展し、明治時代の町村制の施行で17村にくくられたが、図1はそうした状況を示すものである。

その後の展開を見ると、赤間町や津屋崎町などいくつかの町が生まれ、さらに第二次世界大戦後の経済発展で町村合併が推し進められた。結果として、2005年に宗像市と福津市の2市体制となり、村や町とよぶ基礎自治体がむなかた地域から全て解消したとはいえ、2つの市は個別に独立したのではなく、小中の学区はそれまでのことをベースにしつつ、国・県の出先機関の運営、広域自治行政（水道、ごみ処理、救急、消防など）の強化、主要産業に関わる農協や漁協の一元的運営、大学の進出などで、より繋がりを強めるに至っている。

なお、図1を示したのは、江戸時代やそれをもとにした明治時代の村の名が、現在も

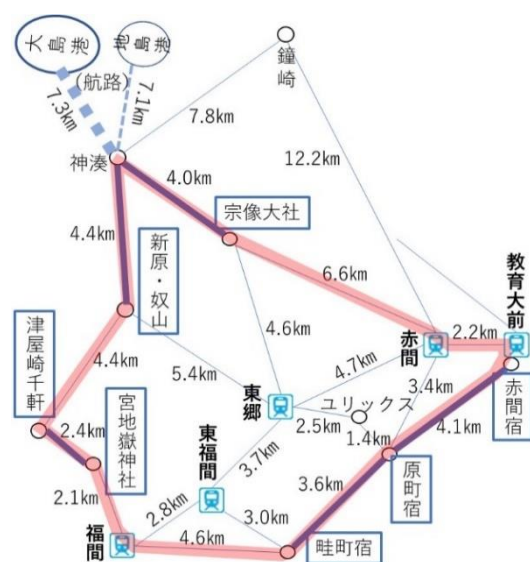


図2 神郡「宗像」の三大地域資源と道路網による回遊ルート（ピンク色のリンク）と距離イメージ

一口メモ(1)：大宝律令にさかのぼる九州唯一の神郡「宗像」

日本書紀によれば、天武天皇（大海人皇子）の第一皇子に高市皇子がいるが、その母は胸形君德善（とくぜん）の娘・尼子娘（あまこのいらつめ）と記されている（一口メモ(2)）。その頃、大宝律令の制定（701年）が進められ、特定の神社に関し神郡（しんぐん）が定められた。郡からの収入を神社の修理、祭祀費にあてる特別の扱いをする郡のことである。令集解によれば、723年（養老7年）に全国で8か所の神郡があり、その一つに筑前国宗像郡が挙げられ、九州では唯一一つである。いわば宗像大社のための領地、神域であり、その住民は神領民ともいわれ、本文に述べるように通常とは別で、特異な文化圏を形成している。

両市内の多くで地区名、字名に用いられ、公共施設名や店名の由来となり、あるいはむなかた地域の遺跡や歴史、人々の思いや活動を語る上で不可欠なことによるものである。

ところで、宗像市は、福岡市および北九州市の中間にあり、特に第2次世界大戦後だが、両市から1時間足らずの通勤・通学圏として開発が進んだ郊外型住宅都市である。人口も若干だがいまなお増加しつつあり、2つの大都市からの影響を強く受けている。地勢についてみると、南端で山地に接し、東側の岡垣町とは、地域を守るかのように、宗像四塚連山（湯川山、孔大寺山、金山（かなやま）、城山（じょうやま））が境をなし横たわっている（写真①、図2参照）。北側は玄界灘で、神湊（こうのみなと）の半島の先に勝島（無人の小島）があり、地島、大島があるとともに、沖合に沖ノ島が浮んでいる。

一方、福津市も、南に山地があり、北は玄海灘の海域に面し、渡半島の北西端に市内唯一つの鼓島（つづみじま）があるが、これは岩礁といってよい。また、山地も少なく、森林面積は宗像市の3割程度である。こうした状況から、福津市は、宗像市に比して人口、面積は小さいが、人口密度は逆に約1.5倍であり、都市としての姿がより鮮明である。

要するに、むなかた地域を全貌すれば、馬蹄に似た地形をもつ2つの郊外都市が背中合わせにくっついて一体となり、東西、南北20kmにわたり広がっている。玄界灘に面する海岸は、鐘崎、神湊などの半島が突き出て、その間はそれぞれで延長5km以上にも及ぶ砂浜が弧を描き、海水浴や海のレジャーにと市民や遠来の客が一緒に楽しみ姿がある。

あるいは、緑ゆたかな小高い山々に囲まれ、九州唯一の神郡由来の歴史遺産・遺跡を積み重ねるとともに、玄界灘に面した浦々で漁業が活発である一方、地域の両サイドにある大都市との繋がりを強めながら、複数の住宅団地が鉄道および国道に沿って整備されているといってもよい。

因みに、地域の全人口は約16万人、人口密度は950人/km²である。また、図1に宗像市および福津市の市章を示すが、それらは、こうしたむなかたの状況を意識して作成されたようにみえる。宗像大社、宮地嶽神社の加護のもと、海と山、田園と都市がびったり合さり、群れなす人々が飛び跳ねて暮らす文化都市の紋章との感がある。

むなかた地域へのアクセスについて

むなかた地域は、その地理・地形状況を踏まえ、古代から広域交通に対処する交通ル

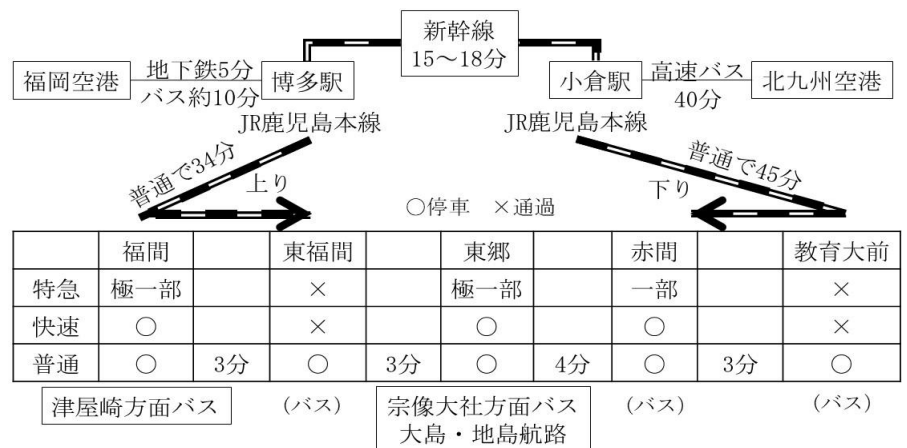


図3 空港と鉄道によるむなかた地域へのアクセス

ートがあり、都と大宰府を結ぶ山陽道・大宰府路が通過した。あるいは、古代海人族が定住し、我が国の外交や対外交易のための航海を担い、大和政権を支えてきた。近世には筑前国の幹線道の一つとして西洋の学問、文化等の交流の道である長崎街道の情報が伝わる要衝として唐津街道と宿場町が発達し、活発な往来があった。加えて江戸時代の後期になると、筑豊地域で石炭が採掘され近代の重要なエネルギー源となり、また、明治時代には隣接した北九州市八幡地区に製鉄所が建設され、それらを支える幹線道や鉄道の建設があった。

このように、むなかた地域は時代に即して広域交通の中継の役を果たし、そのことが地域のアクセスの向上へとつながり、現在に至っている。その結果、むなかた地域へのアクセスは必然的に充実したといつてよい。

福岡空港、北九州空港、および山陽・九州新幹線の小倉駅、博多駅が、国内外からむなかた地域へ流入入するための交通拠点であり、それらからつながる鹿児島本

線や、九州縦貫自動車道が本地域へアクセスするための基軸となり、それらと域内の国道および主要な県道が繋がる状態にある。地域に隣接して九州縦貫自動車道が通過し、むなかたに近接する宮田スマートIC、若宮IC、古賀ICが設置され、九州北部の諸地域からのアクセスが容易である。その上で、例えば高速道路の若宮ICを用いる場合は、ICを出て一般県道75号に入り、JR教育大前駅方面に約8km進めばかつての赤間宿である。この赤間から博多方面へ5kmほど進めば原町、そして畦町に辿りつく。若宮ICからは、県道35号および国道495号と進むと宮地嶽神社に9km、20分で到着する。

鉄道については、JR鹿児島本線が通過し、前述の空港や新幹線利用も含め、福岡市や北九州市からアクセスする駅として、JR鹿児島本線の福岡、東福岡、東郷、赤間、

教育大前の5駅がある(図2、図3参照)。北九州、福岡の両都市から40分ほどの時間距離であり、教育大前駅に着くと、そのすぐのところが本風景街道における唐津街道起終点となる赤間宿である。赤間駅、東郷駅および福岡駅の周辺は宗像、福津両都市の中心市街地であるとともに、世界遺産の「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群や、城内各方面に向けた路線バスが発着している。

あるいは、福岡市都心部の天神地区からも福岡、赤間、宗像大社、神湊などの主要地区に向けてのバス路線があり、近年その利用が活発である。

こうしたアクセス交通のネットワークと、その多頻度な運行を踏まえ、2大都市、福岡市および北九州市からみると、むなかた地域はそれらの両都市圏に含めることができ、思い立って即座にでかけることができる便利な郊外都市である。

むなかた地域を巡る風景街道の構築にあたって

むなかた地域内でコアとなる主要な地域資源を絞り込めば、古代神道を今につながる宗像大社関連、唐津街道におけるオールドタウンとしての宿場まち、夕陽に輝く宮地嶽神社と津屋崎千軒の福津地区の3点がある(図2)。これらと、それぞれの周辺を含めた神郡「宗像」が、本ガイドが対象とする風景街道のエリアである。

このことを踏まえ、むなかた地域の道路網を展望すれば、本地域内は2つの国道3号と国道495号が貫通し、城内回遊の縦糸でありメインルートである。

その上で、域内では主要地方道が発達し補完している。赤間・神湊間の宗像玄海線69号、福津市から玄海迄の福岡宗像玄海線97号、南北間の赤間・鐘崎を結ぶ若宮玄海線75号、さらに、南側の東西を結ぶ飯塚福岡線30号などがあり、山地や山麓、平地、沿岸を縦横断している。

これらにもとづく道路ネットワークを用いて規模をイメージするために地域内各地点間の道路距離を示せば図2の付図に示すとおりである。拠点間の各リンクは10分程度ドライブする繋がりであり、JR各駅を起点に行先毎のルートに沿ってバス路線および島への定期航路がある。

あるいは、一部の山麓や峠を除けば、さほどのアップダウンもなく、3、4日に分ければ、福岡、北九州からのレール&レンタサイクルによる日帰りツアーの繰り返しも十分可能である。

以上を踏まえ、より具体的に主要な地域資源と道路網・交通網にもとづく回遊のための地域内のメインルートを示せば図2の大線のとおりである。世界遺産・宗像大社に登

録された構成資産(一章4節)に限れば、宗像市田島、宗像市大島、福津市勝山の玄界灘の沿岸地域を巡ることになるが、それには国道495号がメインであり、これに県道69号を加えればよい。

宗像大社の中津宮がある大島へは、国道495号や県道69号、あるいは東郷駅からのバスを活用して神湊港にアクセスし、そこからフェリーや旅客船を活用すればよく、島内は県道541号が周回している。

唐津街道は、近くを国道3号が通過し、これを各地域の景観サイトにアクセスする

メインルートとして利用しながら、教育大前駅、あるいは逆に福岡駅から県道503号に沿って進むと、赤間、原町および畦町の3宿場間が往来できる。因みに、赤間宿と畦町との距離は約9kmであり、歩くだけならば2時間程度である。豊臣秀吉や各藩の参勤交代のように途中で寄り道し、休むにしても1日トリップで済む。

重複するが、福津地区については、国道495号で、福津市勝浦・奴山の新原・奴山古墳に加えて、塩田跡、津屋崎千軒、宮地嶽神社と巡り、その上で長大な弧を描く福津海岸を訪れることができる。福岡駅と勝浦間の距離は約9kmで、これまた2時間程度の徒歩距離である。加えて、JR各駅を拠点にした地域内のバス路線があるが、本数が必ずしも十分でなく、事前の検討が必要である。

むなかた地域を巡るにあたり、参考となる情報や地図などの資料が必要だが、表1の現地案内所で入手でき、また、インターネット検索も充実しているので活用するとよい。

表1 情報案内

地域	情報案内所	住所	電話
宗像地域	福岡県文化振興課世界遺産室	福岡市博多区東公園7-7	092-643-3162
	宗像市世界遺産課	宗像市深田588	0940-62-2600
	福津市文化財課	福津市中央1-1-1	0940-43-8134
	宗像市商工観光課	宗像市東郷1-1-1	0940-36-0037
	宗像観光協会情報コーナー	宗像市江口1172	0940-62-3811
	(道の駅むなかた内)		
	街道の駅 赤馬館	宗像市赤間4-1-8	0940-36-4128
	ふくつ観光協会	福津市中央3-1-1	0940-42-9988
	宗像歴史観光ボランティアの会	宗像市江口1172	0940-62-3811
	(道の駅むなかた内)		
	おおしま観光案内所	宗像市大島1809-18	0940-72-2226

一 神郡「宗像」の全景

1 古代の景―古代祭祀の時代

a 古代における交流の景

我が国で最も古い歴史書の「古事記」（712年）、「日本書紀」（720年）に、むなかつ地域のこととして宗像大社の記述がある。それによれば、宗像大神は、別称を「道主貴（みちぬしのむち）」といい、「最高の道の神」とされている（日本書紀）。古代には海の航海の安全の神として、今日では交通安全の神として崇められているが、「貴（むち）」は神に対する尊称である。因みに、天照大神は「大日靈貴（おおひるめのむち）」、出雲大社の大国主命は「大己貴」（おおなむち）と呼ばれ、これら三神だけに貴が用いられている。

さて、宗像大神は、須佐之男命との誓約（うけい）で天照大神から生まれた三女神の

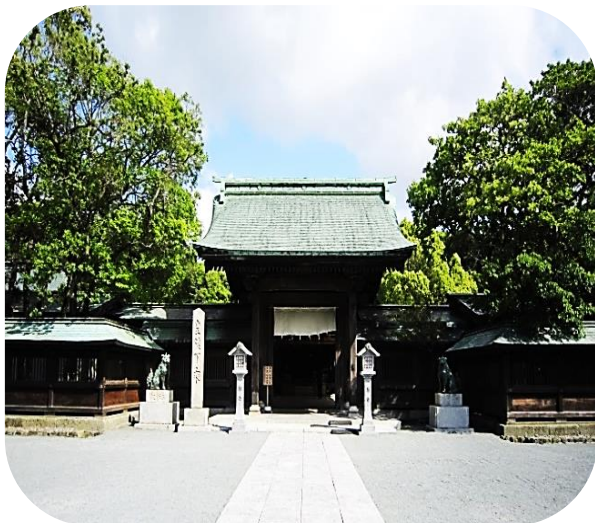
田心姫（タゴリヒメ）（沖ノ島・沖津宮）②、
湍津姫（タギツヒメ）（大島・中津宮）④、

市杵島姫（イチキシマヒメ）（田島・辺津宮）③、

である。天照大神の命を受けて天孫を助けるために、海の守り神として海北道中（宗像の田島から、大島、沖ノ島を経て朝鮮半島に至る海路）に降り、三つの宮に分けて祀られている。それらを合わせたものが宗像大社である。それぞれに古代祭場跡と本殿があり、わが国の神道祭祀の起源をなすが、これらはむなかつ地域における計り知れない遺産である。

3世紀の卑弥呼の頃から大陸の魏との交流があり、4世紀の大和政権の成立後における朝鮮半島との結び付きが強まる中、鉄器・須恵器の生産、機織り、工芸漆器の伝搬、土木技術や仏教の伝来があった。そのために博多湾周辺地域がゲートウェイとなり、朝鮮半島へ200kmと最短に位置する宗像はその拠点となった。大海を往来する航海技術を備えた海人族が内海なす沿岸域に住み、4世紀から9世紀にかけ、東アジアとの交流に大きな役割を果たした。

言いかえれば、わが国（倭国）と百済などとの親交が深まり、交流が活発になるにつれ、その途中にある島伝い、取り分け沖ノ島で、航海の安全祈願の祭祀が執り行われた。それが古代祭祀の先駆けであり、その様は岩上、岩陰、露天などに移り変わり、そして現在の神殿で祀る方式へと進展した。この間の経緯を、世界遺産として公表された沖ノ島の資料を参考に、著者なりに簡略化し



③ 宗像大社辺津宮 市杵島姫神（宗像市田島）



② 宗像大社沖津宮 田心姫神（宗像市沖ノ島）



④ フェリーから眺める宗像市の大島



図4 ユネスコ世界遺産“宗像大社”

て説明すれば次のとおりである。

始まりは4後世紀後半～5世紀の古墳時代である。朝鮮半島への進出、伽耶への出兵、倭五王の中国南朝宗への遣宗使が貢物を送るなどの往来があった。そのために沖ノ島における巨岩の上で岩上祭祀が行われ、航海の安全が祈られたが、その場所の岩の隙間から銅鏡、勾玉、鉄剣などの奉納品が見つかった。これらは当時の古墳群の副葬品に共通するものである。

続く5世紀後半～7世紀は、百濟から仏教が伝来、聖徳太子の摂政、遣隋使の派遣などがあった古墳および飛鳥時代である。庇状になった巨岩の陰での祭祀へと変わり、朝鮮半島から伝えられた金銅製の馬具、金製指輪、さらにはシルクロード経由と考えられるイラン製のカッタグラス碗片などが出土している。

飛鳥から奈良時代にかけての7世紀後半～8世紀前半、わが国は白村江の戦い(663年)に敗れ、防人の配備、遣唐使が派遣された時代である。また、古事記、日本書紀、万葉集などが編纂されたのもこの頃である。その中で、僅かな岩陰と大部分の露天にまたがる半岩陰・半露天祭祀が行われたが、そうした祭祀場の跡から唐時代の彩色豊かな陶器・唐三彩長頸瓶片、金銅製の龍頭などが出土している。

そして、8世紀～9世紀末の奈良時代～平安時代中期は、巨岩を離れ、現在の沖津宮の近くの平坦地における露天祭祀へと変化した。この頃になると神仏習合が始まったが、金銅製の紡織具、人形、琴、土器といった雛型の祭祀品が残され、あるいは、わが国で製造された銅銭の富寿神宝などが見つかっている。これから祭祀のあり方に仏教が影響するなどの特段の変化はなかったといえよう。

沖ノ島の古代祭祀は、約500年間続いたが、9世紀末、皆さんも周知のように、菅原道真の建議(894年)で遣唐使が廃止され、本章4節に述べるように神殿が建てられるに至り、消滅したとみることができ。それにしても島からは数えきれない出土品があり、そのうちの8万点以上が国宝に指定され、海の手倉院と称される所以である。

本遺産で、九州本島の辺津宮の裏手に高宮祭場⑥がある。露天祭祀の場だが、いまでも例大祭や雨ごいなどが行われ、正面奥に磐境(いわさか)や神籬(ひもろぎ)がある。写真に見るように、磐境は自然石を並



⑥ 高宮祭場 (古代祭場)



⑤ 宗像大社中津宮 湍津姫神 (宗像市大島)



⑦ 新原・奴山古墳群 (ユネスコ世界遺産：福津市)

一口メモ③：天皇の呼称、住吉神のいわれについて (荒木博之、田村園澄：古代海人の謎 宗像シンポジウム、海島ブックス、1991)

文献によれば、天皇の呼称のスメラミコトのスメは清なる意味のシミからきているとされ (日本書記で清の字の文脈では9割が天皇に関わっている)、住吉神のシミも清なる意味からきていと言われ (日本人のスムは透明になると考えていたところから清に繋がる)、畿内の古府・百舌鳥古墳群にある大和朝廷の巨大古墳が築造された5世紀頃から朝廷との強い関係があるとされている。

一口メモ②：宗像氏と天皇家との関係

7世紀頃、宗像氏は胸形氏とも記し、胸形君徳善 (むなかたのきみとくぜん) の子の尼子娘 (あまこのいらつめ) が大海人皇子 (後の天武天皇) と結ばれ高市皇子をもうけている。このことは宗像氏と大和朝廷との強い関係があったことを物語るものである。

べて造られた径1、2mの区画の祭場であり、神籬は、祭祀の対象となる神霊が招かれて依りつく石や樹木のことである。

九州本土の辺津宮③、⑧と、大島の中津宮⑤、沖ノ島の沖津宮⑨の3社は一直線に結ばれ(図4)、これらを合せたものが宗像大社で、そのこと自体が何か神がかりな思いがする。また、沖ノ島は、全体がご神体で神職などの関係者以外は直接上陸できず厳しく制限されているが、それがいつからかはつきりしない。江戸時代に、鎖国で外国船監視のため福岡藩の防人が置かれていたとの聞き取り記録もある(筑前続風土記)。

以上の他、本遺産に関連するサイトとして5〜6世紀の新原・奴山(しんばる・ぬやま)古墳群⑦がある。新原、奴山とは古墳が展開する土地の字名であり、これらは、地域における海人族の支配者としての宗像氏など海の民が静かに眠る墓である。

b 中古代(平安時代)の景

むなかた地域を支配していた海人族は、古事記では“胸形”、日本書紀では“胸肩、胸形、胸方”と記され、さらに、正倉院文書などには“宗形”とあるが、後に宗像氏に改められた。大化の改新で国郡制が敷かれ、宗像大社の神主が神郡の大領(郡を治める地方官)を兼ねた(7世紀後半)。その後、684年における八色の姓が制定されたが、胸形君は朝臣の姓を受けて宗像朝臣となった(一口メモ②参照)。10世紀に入ると神主の大領兼任が禁じられ、社家を分離し、大宮司職(神社の神職の長)が正式に認可された。このことは、宗像氏がその権威を確立すると共に武士化し、国人(地方の領主)となったことを意味する。平治の乱(1159年)(注)で勝利した平家と宗像大宮司が結びつきを強め、宗像一族である許斐(このみ氏は平重盛の船奉行、船大将を勤めた。また、領地については、山田郷が早くから拓かれ、そこに私領があり、その周りへと切り拓いたものと推察される。

(注) 1159年、後白河法皇をめぐり、藤原通憲と藤原信頼が対立し、前者に平氏清盛が、後者に源義朝がついて争ったが、法皇は幽閉、通憲は殺され、信頼は斬罪、源義朝も東国に逃れる途中殺され、義朝の子頼朝は伊豆に流された。

2 中世の景―宗像大宮司の時代

a 源氏の御家人となった宗像氏の鎌倉時代、



⑨ 宗像大社の沖津宮(宗像市沖ノ島)



⑧ 宗像大社の辺津宮(宗像市田島)



⑩ 沖ノ島の沖津宮遥拝所(宗像市大島)



鎌倉時代に入ると、宗像大宮司は平家方から源氏方へと転じて鎌倉幕府の御家人となり所領が安堵され、日宋貿易で栄えた。その当時の、行政組織をみると（宗像市史 通史編三巻―古代・中世・近世）、宗像大宮司を頂点に、その行動を強くチェックする内談（ないだん）といわれるものがあつた。全会一致を原則とする合議機関であり、宗像氏の一族や有力御家人で構成されていた。

この大宮司と内談のもと、公文所（くもんじよ）と田所（たどころ）があつた。前者は郷単位に農民に課する多くの諸税の配分や、税、鰐、馬などを納める納所（なつしよ）を管理し、それらに関する事務を管轄した。後者は図師が行う検田等の土地関連事務や人夫、伝馬の割り振りなどを行い、これらを担当する役人を宗像直人（じきにん）と呼んだ。

下部の郷には、年貢米、神田米、立用米、神役を徴収する弁済使（べんさいし）、事務などの書記をする公文（くもん）、年貢公事徴収の責任者としての名主（みようしゅ）が設けられ、加えて、犯罪を取り締まる検非違所が置かれた。そして、宗像大宮司がこれらを統括した。

b 南北朝の動乱を生き抜いた宗像家

南北朝の頃になると北条氏の残党による反乱が各地で起こった。北部九州でも鎮西探題の北条英時の養子となった規矩高政（注）が、豊前田川郡糸田庄（福岡県田川郡糸田町）を領した夷弟の糸田貞義と共に、帆柱山城に立てこもる反乱をおこし、宗像大宮司がその鎮圧に当たっている。

注：鎌倉末期の北条一門の人物で、もとの名は北条高政だが、豊前国規矩郡（後の企救郡であり、現在の北九州市の門司・小倉一帯）を領したことから、規矩高政とも呼ばれた。

また、南朝側との戦乱で足利尊氏が九州に落ちのびた時、宗像氏は尊氏を受け入れるか否かの議論の末、迎え入れ支援した。宗像大宮司の軍団は武器、軍馬、馬具等を集中管理して、一大事が生じた時に家臣団に配分する仕組みがあり、尊氏一行に対しそれを供与し支援した。そのことが、九州での最大の決戦である多々良浜の戦い（1336年）であり、官方側に着いた肥後国の菊池軍を破り、反転攻勢で京に再上する機会に繋がったといわれている（1口メモ（4）参照）。

しかし、1350年になると、足利政権の内乱が勃発。社会的に不安定な状況が続く中、九州地方は1361年に征西將軍宮・懷良（かねよし）親王（後醍醐天皇の皇子）が太宰府を制圧した。また、北部九州の海域で勢力を持っていた集団や倭寇が出没し、明は懷良親王を日本国王（外交の上で）として何度も接触を図り鎮圧を強く求めた。

こうしたことも含め、九州の北部でも、政情不安が影響し、官方、武家方が入りまみれて争い、そのことで宗像氏に大きな影響と苦難をもたらした。多々ある争いの中で、

1口メモ（4）：南北朝時代の多々良浜の戦いについて

本文にあるような各地の反乱状態は中央の情勢が反映されているとみることができる。後醍醐天皇による親政にも関わらず内裏の造営計画、内奏政治、恩賞の不公平等で武士団達の不満がつのり、人心が少しずつ離れつつあった。その中で、足利尊氏が鎌倉に居座ることに対して尊氏追討の命が下り、各地より武士団が京に上ることが起きたが、そうした内乱の代表的なものが観応の擾乱（1350～1352）である。足利政権の内紛で北朝側について尊氏と南朝側支持の弟の直義との争いで、家臣団等を巻き込んだ争乱であった。

本文中の多々良浜（福岡市東区流通センターの近く）の戦いについて、菊池軍の敗戦の原因は、多々良浜での戦闘での最中に砂塵が舞った煽りを受け、武士団が怯んだとの説もあるが、肥後国の八代から、戦闘に戦闘を重ねて多々良浜まで来たため、武士団が相当疲労困憊し、戦意に欠けていたとも言われている。なお、足利尊氏は、宗像大社の辺津宮に詣でている。

1口メモ（5）：宗像大宮司家の主な出来事と居城の変遷（現地の説明版により作成）

宗像大宮司家の居城として白山（はくざん）城（宗像市池田の弘大寺山から南に伸びた尾根山頂（319m））、鶯ヶ嶽城（宗像市赤間文教町の城山（369m））、許斐山城（宗像市王丸と福津市福岡町八並の境の許斐山（271m））の跡が現在も残る。許斐山城は、1130年、15代宗像氏平が許斐に姓を改め築城、後に本家宗像の出城となり、許斐家が継ぐが、1499年に鶯ヶ嶽城城主に攻められて途絶えた。その後、家臣が再築させるも1587年に廃城となった（福岡町史、説明版）。一方、白山城、鶯ヶ嶽城の経緯は以下のとおりである。

鶯ヶ嶽城（岳山城）

白山城（山田白山城）

11世紀 6代宗像妙忠築城と伝えられる。

1186 — (1336 足利尊氏を受け入れ、多々良浜で勝利) — 36代宗像氏国により築城

1370 54代氏俊が修築し入城。

1551 — (1554 宗像氏の御家騒動で、山田御殿において大惨事) — 黒川鍋寿丸(後の氏貞)が入城

1557 — 黒川鍋寿丸が元服し氏貞を名のる。

1560 79代氏貞が大改修し、岳山城に改名し居城とした。

1586 氏貞死去で、宗像家断絶

— (1588 九州征伐の帰途立ち寄った豊臣秀吉の命で廃城となった) —

c 宗像大宮司の交流・交易

むなかた地域は九州の北部沿岸域に位置し、地理的あるいは経済的な面からも平安末期から中世の初頭にかけて東アジアとの交流や交易が行われていた。このため、他地域と相違し、経済的、文化的、かつ人的交流に独特なものが残されている。

例えば、学術文化で見ると、宗像大社には鎌倉時代の色定法師（しきじょうほうし）。建仁寺榮西の弟で、臨済宗筑前香正寺の学僧）の一筆一切経の經典（国重要文化財）が



①外国人居留地唐坊があった現在の津屋崎小学校校庭（福津市）

1口メモ(6)：海上を支配した宗像大宮司

大宮司は宗像沿岸域の海上交通支配し、沿岸域を航行している船舶が難破し漂着した場合、積み荷などは船主、荷主の所有権を離れ、宗像の神の所有物になるという慣習法を持っていた。特に、冬場の日本海は波浪が強いことで知られ、船舶は沿岸域を航行することから、難破することも多々あり、このような慣習法を備えていたと推察される。

一口メモ(7)：現在の宗像大社の秋季大祭

今日における宗像大社の祭事を拾い上げると、沖津宮、中津宮、辺津宮では毎月何かが行われている。その中で、毎年10月1日～3日の秋季大祭（田島放生会）は、国家安泰を願い、五穀豊穡に感謝し、生き物の生まれる力を戴くなどで人々が喜びを分かち合う大切な祭祀である。本文ではかつての放生会の内容を紹介したが、現在もそれに近い形で受け継がれている。見学に訪れる人もいと思うるので紹介しよう。1日目は、沖津宮と中津宮の御神輿を乗せた2隻の御座船と100隻を超える漁船が船団を組み海上パレード“みあれ祭”が行われ、辺津宮に神々をお迎えする。その後、3日にわたって翁舞、風俗舞、流鏝馬などが披露される。そして、締めくくりは、3日目の“神奈備祭”である。高宮祭場において、薄暮の中、明かりをともしながら巫女による悠久の舞が披露され幻想的である。

d 芸能文化としての宗像神社の祭礼

が中世に至っていち早く確立されたのは、その背景に海上交通権や流通業、運送業の仕組みがあつたことである。

戦乱が続き不安定なこの時代にあつて、むなかつた地域では宗像大社を中心に盛大な祭礼が行われていた。村、郷、嶋の各域内に75の末社があり、6千程の祭事があつた。住人たちは、祭礼を遂行する経済基盤として割り当てられた田地からの収穫を財源とし、村民も費用・労力を提供することで宗像の神々から庇護を受けた。これは神と土地や住民との支配・共同関係が相互に結ばれ、確立していたことによる。

祭礼には、芸能が付随し、神を歓待する余興が行われた。例えば、放生会では浮殿で饗宴があり、昼に舞楽・相撲が行われ、夜に風流（衣装をまとつての群舞、田楽、延年舞（えんねんまい）などの後に行われる余興的芸能の総称）が催された。翌日は、辺津宮の惣社にて風流、田楽、延年舞が、その翌日には浮殿で舞楽（蝶鳥という舞）や相撲、船闘（ふねくらべ）があり、その後、玉ノ舞が社の猿楽の笛で舞われた。つまり、風流、田楽、延年舞などは中世における宗像の代表的な芸能であつた（一口メモ（7）参照）。

これらから分かるように、宗像大宮司は宋との経済的な強い関係を伺い知ることができ、そのことに執権・北条時宗も注目し、宗像大社を時宗領に編入したと推察される。また、大宮司領内の津屋崎町には唐坊があり、当時の外国人の居留地は現在の津屋崎小学校の校庭がその跡地①で、その発掘調査によって龍泉窯系の青磁が出土した。このことは宗像大宮司領内に大陸貿易の活動拠点が存在していたことを示すものである。

一方、国内に目を向けると、領内に院領として、八条、後鳥羽、後高倉、後嵯峨、龜山上皇の年貢米を代々納め、前述の北条家の鎌倉への領米の輸送と同様に京都の上皇院にも年貢米を輸送している。このように物資の輸送や年貢米の管理、売買を含め幅広く活動し、これらのため、宗像から都に向けての交通幹線が構築されていたといつてよい。

さらに、沿岸の神湊（こうのみなと）、大島、地島、沖ノ島の港は、航行する船舶の避難港でもあり、これらの港を管理することは、前述した海上交通を支配することに繋がるものであつた（一口メモ（6）参照）。中世期の宗像大宮司のこのような海上交通権の支配は、域内の問丸（中世の商品の委託販売、運送業で、後に営業権を独占し、商業化した卸売業を問屋と呼んだ）などの流通経済活動と密接に関係している。地域の交通網

宗像大宮司家は、前ページの1口メモ（5）の年表に示すように、氏貞の死去で嗣子なく断絶したが、小早川隆景に仕えていた武將・草刈重継（後室が氏貞の次女）が朝鮮出兵の武功もあつて豊臣秀吉から宗像家の名跡を与えられ、祭祀を受け継いだ。

一口メモ（8）：幕末の勤王の志士・平野國臣（1828～1864）

福岡市中央区今川の鳥飼神社の境内横に平野神社があり、平野國臣の生誕の地である。福岡藩の武士であつた24歳のとき、宗像郡大島に普請方として赴任したが、その時、藩主の跡目争い（お由羅騒動）で薩摩藩から大島へ亡命していた島津斉彬の側近・北条右門と知り合い、尊王攘夷に関心を持つに至ったといわれている。すなわち、大島への赴任は平野國臣が志士へ目覚める一歩であつた。

その後、35歳の時脱藩して上京し、薩摩藩士の西郷隆盛や、筑後久留米水天宮神官で志士の真木和泉、庄内藩の志士・清河八郎らと親交をもち、討幕に奔走した。1863年に三条実美ら攘夷派公卿や真木和泉と大和行幸を画策するが八月十八日の政変で挫折。大和国での天誅組に呼応し但馬国生野で挙兵するがまたも失敗し、捕えられて京都所司代が管理する六角獄舎に預けられたが、禁門の変（1864）の際に生じた火災を口実に殺害され、37年の短い生涯を閉じた。

平野國臣のエピソードとして加えれば、安政の大獄から逃れるため勤王攘夷派の僧侶・月照と共に錦江湾に身を投じた西郷隆盛を助けている。また

我胸の燃ゆる思ひに くらぶれば 烟はうすし 桜島山
を詠んだことでも知られている。

3 近世の景―福岡藩の時代

宗像大宮司家断絶後、わずか14年の間に、豊臣秀吉の九州攻め、そして秀吉の朝鮮出兵、関ヶ原の戦いと立て続けの国を揺るがす動乱の中で、筑前国でも戦国大名の攻防と入れ替わりがあった。その中で、小早川隆景のように、宗像大社に一時的に神領を与え、拝殿の再建を図ることもあったが、結局は鶴ヶ嶽城の廃絶、神領の没収となり、宗像家は離散・縮小した。

そして1600年、江戸時代に入ると、黒田長政の福岡藩となった。その際、神領は没収のままだが、宗像三社の造営や修理は国主が負担し、わずかに残った社家の人々には田島、大島、沖ノ島に田畑を分け与え、宮仕えをさせる保護策がとられた。

例えば、辺津宮の本殿の周囲を囲むように121の末社がある。これは黒田藩の第3代藩主の黒田光之（みつゆき）が、神郡「宗像」にもともとあった神社をまとめて寄進したものである。大島の辺津宮遥拝所の社殿や中津宮の拝殿なども寄進されている。江口の浜に、中津宮や沖津宮の遥拝所が設けられていたが、福岡藩主は辺津宮参拝後、ここから島に向かって参拝したともいわれている。

あるいは、域内では9浦（福岡、津屋崎、渡、勝浦、神湊、大島、江口、鐘崎、地島）で港湾機能維持のために修築工事が行われた。地島の波止に波止修築奉行を置き、修復事業を行い、寄港する船舶に対して岸壁の材料と石材を寄進するように義務付けるなど、独特の施策がとられたこともある。

4 世界遺産「宗像・沖ノ島」

2017（平成29）年7月、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群が、ユネスコの世界遺産として登録された。その内容は、本章の1節に述べた4〜9世紀における宗像大社の祭祀とその関連遺産群である。古代、大和政権が推しすすめた東アジア諸国との交流を、航海術にたけた海人族である宗像一族（出雲系の古代豪族ともいわれている）が支え、そのために、沖ノ島、大島、九州本島と島伝いに宗像三女神を祀り、航海の安全を祈る祭祀を行い、それらが今に伝えられている（図4）。構成資産を一覧に示せば、表に示すA〜Eの5箇所である。

Aの沖ノ島②は、九州本島の辺津宮から約60kmの沖合にあり、周囲4kmの島である。新生代第三紀（2000万〜300万年前）以来の地殻変動や周辺海域の火山活動などの噴出物が積もってできた玄界灘の孤島である。紡錘形をなし、最も高いところは北部の一の岳（標高244m）である。島全体がご神体で、海岸近くの小屋島（高さ29m）、御門柱、天狗岩が鳥居の役目をなしている。かつては特別に許可された男子のみが禊をして上陸することができたが、いまでは島に常駐する神職を除いて、一般の人々の島への上陸は禁止され、一本の木も、一本の草も、一つの石も持ち出せず、その自然は沖ノ島原始林として国の天然記念物である。

また、島で見聞したこと的一切は口外できないとされている。とはいえ、過去に遡れば、元寇後に編纂された「夫木和歌抄（藤原長清選）」（1297年）に

打つ波に 鼓の音をうち添えて 唐人をよせぬ 沖ノ島守り

の歌がおさめられ、あるいは、1905年の日露戦争日本海戦では、樹上から海戦の様子をじかに目撃したことが「沖津宮日誌」に記される。対馬と共に国防最前線であった。

B⑩およびC⑤はともに大島にある。大島は、筑前大島ともいい、面積7km²で、福岡県の島としては最大である。九州本島の神湊港（宗像市）からわずか7km、旅客船で15分、フェリーで25分のところに位置する。中津宮は大島港のターミナルから300mで、目に見え、その背後の御嶽山山頂（標高224m）の近くには中津宮の奥宮と呼ばれる御嶽神社がある。また、沖津宮遥拝所⑩は中津宮と反対の海辺にあり（図11参照）、晴れた日は沖ノ島がかすかに眺望できる。

Dの辺津宮⑧は釣川の河口から約3km遡ったところにある。もともとは釣川に沿って、数百m程度の幅で現在の宗像市役所近くまで入り海があった。そのほとりの高宮祭場は宗像三女神降臨伝説が語られる小山の上にあり、以前から露天祭祀が行われ、現在も春や秋の大祭などの行事が催されている。

辺津宮の境内の状況は図5のとおりである。2つの鳥居をくぐって太鼓橋を渡れば手水舎、祓舎があり、そして神門をくぐれば拝殿および本殿にでる。本殿の後ろに回ると神木の榎木（樹齢500年）や相生の榎などがある。釣川よりの一角には神宝館があり、沖ノ島で発掘された中国からの文物（三角縁神獣鏡、金銅製龍頭、陶器の唐三彩長頸瓶）や、朝鮮半島新羅の金製指輪、サザン朝ベルシャ製のカットグラス片など、沖ノ島で出土した国宝がすらりと展示され、目を見張る秘宝の品々に感動させられる。なお、神木や神宝館の先は第二宮（沖津宮分社）、および第三宮（中津宮分社）であり、大島に行けないときはここでお参りするとよい。

ところで、自然崇拜ともいえる古代祭祀の後には三神宮とも本格的な神殿が造られ、そこに宗像三女神が祀られている。それらの現在の姿を改めて眺めると写真⑨、⑤、⑧の

とおりである。

辺津宮は、奈良時代の初めに大規模な社殿を有していたといわれる。その後、幾度となく火災に巻き込まれ、造営が繰り返された。現在の本殿⑧（1578年、重文）は宗像氏貞が再建したもので、柿葺きの切妻妻入りづくりである。拝殿（1590年、重文）は小早川隆景が再建し、やはり柿葺き、切妻妻入りである。中津宮の本殿は宗像氏貞が1566年に再建。沖津宮遙拝所⑩は、銅板葺きの社殿で、その階段手前に寛延三年（1750）と記した碑がある。

沖津宮も、小規模だが神殿がある。それがいつ頃かは不明だが、長らく古代祭祀が続いたものの、少なくとも17世紀半ばには神殿があったとみなされている。幕末に攘夷派の志士として活動した平野國臣（一口メモ（8）参照）が福岡藩士の時代の1851年に大島に赴任し、社殿の普請にあたつたとされる。厳しい自然環境の中、幾度となく修復、改築があり、現在の姿になつたのは、本殿は1869年、拝殿は1932年（昭和7年）で、最近も改装されたが、国の史跡に指定されるとともに世界遺産である。

最後のEは、対外交流のための航海を担うとともに、沖ノ島の古代祭祀を執り行った海人族の宗像氏がいたことを証明する新原（しんば

世界遺産「宗像・沖ノ島」の構成資産

- A 宗像大社沖津宮（宗像市沖ノ島）
（沖ノ島、小屋島、御門柱、天狗岩）
- B 宗像大社沖津宮遙拝所（宗像市大島）
- C 宗像大社中津宮（宗像市大島）
- D 宗像大社辺津宮（宗像市田島）
- E 新原・奴山古墳群（福津市勝山・奴山）

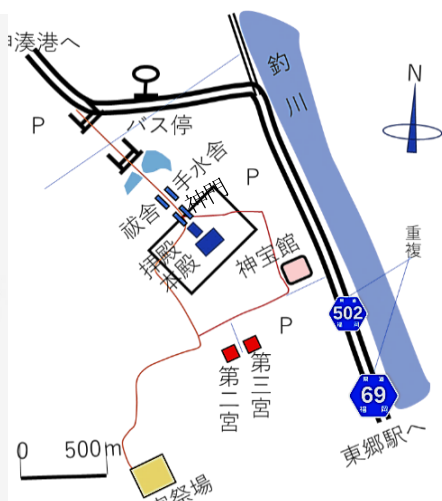


図5 宗像大社辺津宮（宗像市）

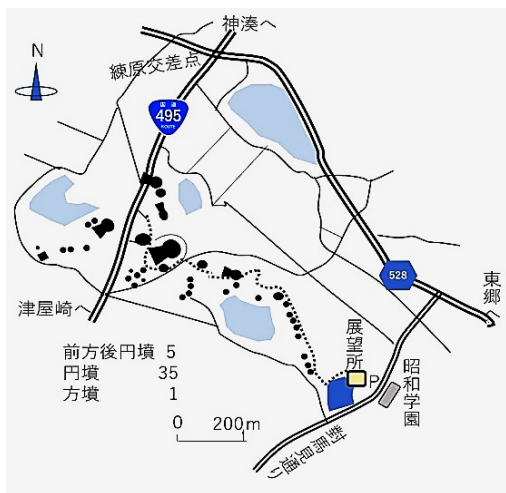


図6 新原・奴山古墳群（福津市）

る）。奴山（ぬやま）古墳群⑦である。高宮祭場の南側を東西に県道502号が走るが、それを西に向かい小山を越えて福津市に入ったところで国道495号に交わる（図6）。その交差点から国道を南下すると、約500m進んだところに新原・奴山古墳群がある。先に釣川に沿って入り海があったことを紹介したが、福津市の津屋崎側にも古代に大きな入り海があった。現在の勝浦・津屋崎干潟を、津屋崎漁港から国道495号あたりまで幅をひろげ、勝浦小学校近くまで伸びる範囲が入り海である。玄界灘とは勝浦から津屋崎の渡地区に向けて長く伸びた砂州（海の中道）でさえぎられ、トンボロな状態である。その入り海の内陸寄りの高台に新原・奴山古墳群が玄界灘を眺めるように作られている。全部で41基だが、うち円墳が35基と最も多く、次いで前方後円墳5基、そして1基はむなかた地域には珍しい方墳である。これらの中、全長80mの前方後円墳が最も大きい。恐らく大和政権と繋がりがあつた宗像一族の有力者のものと推察される。

余談だが、一言つけ加える。沖ノ島、大島、そして辺津宮がある田島地区が直線に並び（第二章1節参照）、あるいは釣川に沿って入り海があった。このことに関連し一帯の地層図をみれば、活断層が走行していることが理解できる（国土地理院都市圏活断層図（2019年）。北東から北西に向け、釣川の左岸地域に沿うように数本が走り、それらを玄界灘へ延ばすと、大島、沖ノ島を通る西山断層が想定され、島々が並ぶのはこのことによるものである。

二 地域発展の原動力

となつた唐津街道

1 むなかた地域の唐津街道

筑前国におけるむなかた地域は、我が国のゲートウェイを担う博多や九州の主要地点

に通じる位置にあること、太宰府から上方へのぼるルート上にあることなどから、古代の律令国家時代から官道があり、山陽道の大宰府路があった。判然としないところもあるが、延喜式にある筑前8駅として、太宰府(注)から、

久爾(くじ)。福岡市博多区平尾付近)、美野(よしの。福岡市博多区美野島、夷守(ひなもり。福岡市東区)、席打(むしろうち。古賀市)、津日(つひ。宗像市玄海の岬津日浦付近)、嶋門(しまど。遠賀町付近)、夜久(やく。北九州市八幡西区)、独見(ひとみ。八幡東区)、が推定されている。

(注)7世紀後半の筑前国に設置された行政機関は「太宰府」だが、現在の地名等は「太宰府」で、多くの史書にも用いられている。このことから、以下、本文も太宰府を用いる。

こうした中、本風景街道を通る唐津街道は、中世の頃から問丸の流通、運送業の発達とともに盛んに使用され、広域交通を中継してきた。特に、戦国時代から黒崎・赤間・青柳・博多の区間がよく使われ、原形は既にでき上がっていた。室町時代の連歌師の飯尾宗祇(いのお そうぎ)が太宰府に詣でた帰路に、海岸よりの概ね国道495号に即して通り、鐘崎から芦屋、そして若松へとたどった。その途中、大島の夢の小夜島に寄り道し、

浜千鳥 声うちそえて おほしまの 波の間もなく 誰を恋ふらん

と詠んでいる(筑紫道中記)。

豊臣秀吉は、九州征伐や慶長の役の本拠地だった肥前の名護屋城に行くときにも本街道に当たるルートを通過したとのことだが、詳細は明らかでない。ところどころに残る太閤水が、朝鮮出兵に際し秀吉がたどりつつ休憩した足跡を残すといえよう。洞海湾の湾奥と遠賀川の河口を東西に結んで江川が流れている。特に水源があつてそれから流れ下る通常の川と異なり、全体が沿岸に平行な感潮河川で、潮の満ち引きの差で右・左に流れるが、その中程の若松区小敷に太閤水とされる井戸がある。あるいは、県道503号を原町から畦町へとたどると、福津市八並の山ノ口峠を越え、畦町宿に近いところに太閤水と刻んだ井戸がある。さらに、青柳宿から香椎宮に向かう途中(新宮町三代)にもあり、秀吉に同道した津田宗及が井戸を掘り、茶をたてたと伝えられている。

江戸時代に入ると、3代将軍徳川家光の時、徳川幕府は参勤交代の制度を定めた。江戸と国元とを1年交代で往復したが、その制度により幕府直轄の五街道と地方の脇街道による道路網が整えられた。お伊勢参りや、西洋の学問文化を求めている長崎への旅も見られるようになった。

こうした中、前述のように、九州北部は早い段階から道はあるにいったが十分でなく、江戸時代に改めて、小倉(現在の北九州市小倉北区)を起点に、九州内の各方面に向け



図7 唐津街道の赤間～小倉間の諸ルート

て脇街道が整えられた。

長崎街道(小倉～長崎)、唐津街道(小倉～唐津、平戸)、中津街道(小倉～宇佐)、秋月街道(小倉～久留米)、日田街道(福岡・博多～日田)が挙げられる。他に、福岡、博多から金出(篠栗)までと、その先の飯塚市、さらに東に延伸し香春を通り大橋(行橋)までの篠栗街道があり、金武、飯場(三瀬)までの三瀬街道などもあった。

なお、これらの九州の街道で交通量が多かったのは、筑前六宿が存在し、部分的に唐津街道と重複する長崎街道に加え、幕府直轄の西国筋郡代が設置されていた日田への日田街道および肥後から伸びる薩摩街道が挙げられる。

ところで、関門海峡を含む九州北部に限れば、同地域は我が国と朝鮮半島や大陸とを往来する重要な役割を担ってきたが、そのルートは海路が主であった。関門海峡、洞海湾、津屋崎、博多、唐津、さらには平戸などの諸港から海路が発達した。このため、それらを上陸してからの陸路がまた必要であるが、背後に筑紫山地の山、谷が壁をなす地形から、結局は陸路も沿岸地域を通過し、峠越えの山道を利用せざるをえず、全体としてみれば、江戸時代の早い段階までは沿岸域を通過する唐津街道とそれから枝分かれた道が活用された。特に、むなかた地域を含む関門海峡と博多の間でいえば、門司の大里(だいら)で上陸し、門司往還をつたつて小倉へ。そこから、戸畑、若松、芦屋を経て赤間に至り、さらに青柳、香椎、箱崎を経て博多へとたどった。いわば洞海湾を渡る「若松道」であり、中世末期における唐津街道の主流をなしたと考えられる。その後、黒崎から赤間の区間は、内陸よりの複数のルートをたどるに至った(図7参

照)。主なものとして、

「中筋往還」 黒崎宿を出て木屋瀬で遠賀川を渡り植木を経て赤間へ。

「殿様道」 黒崎、中の原、中間、底井野を経て赤間へ。

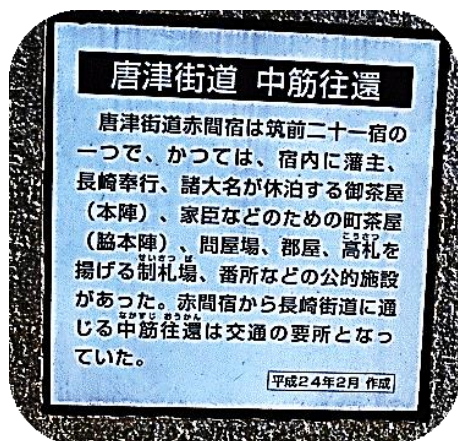
「内往還」 黒崎、陣原、則松、吉田、中間、底井野を経て赤間へ。

が挙げられる。これら3者はすべてが別ルートでなく、図に示すように部分的に分離されるものである。その中で、中筋往還は、西洋文明・文化の流入路である長崎街道に繋がるため、交通による賑わいと共に、海外の最新の技術、文化への接触、海路による参勤交代の禁止、さらに街道の整備などから、主流の存在であったといつてよい。殿様道は、黒田の殿様が良く利用し、後に薩摩の殿様も利用したことからついた呼称である。これら黒崎から赤間への3ルートは、結局のところ新延（にのぶ）で一つに合流し、そこから西へ進むと猿田峠となり、「東鞍手郡 西宗像郡」の郡境、吉武（吉富、武丸）を経て赤間宿に至る。

唐津街道は、小倉から唐津に至る街道だが、その経路が複雑に枝分かれするのは小倉から赤間の区間であり、赤間から西の博多へは一本道である。これは、関門海峡をどうわたるかによるところがあり、また洞海湾や遠賀川が存在することから、大里、小倉、若松、黒崎、芦屋などに分かれる渡海、渡河があったこと、板櫃川を境にして福岡藩と小倉藩の2つに分かれ、それぞれで港を有したこと、遠賀川、洞海湾とそれらを結ぶ感潮河川の江川や後に建設された堀川運河を活用して石炭や米などの運搬路があったことなどが影響したと推察する。合わせて、宗像や安曇など航海術にたけた海人族が古代から存在していたことも理由に挙げられよう。

話を唐津街道に戻して、当時の交通事情を話のタネに紹介すれば、宿における人馬賃金は、福岡（黒田）藩と佐賀藩では、本馬一疋一里が標準で24文であった。宿金は、筑前と豊前国の各宿場で差はあるが、赤間宿でみると平均450文と推定され（近藤典二「筑前の街道」より）、宿場間を8里とすれば、人馬賃金の2、3倍である。

また、参勤交代のための唐津街道の利用は黒田藩と唐津藩が主で、稀に平戸藩、五島藩、大村藩などが利用した。江戸時代後期の1826年（文政8）になると、薩摩藩も、江戸からの帰路を黒崎宿、木屋瀬宿の長崎街道から唐津街道に入り、赤間宿、博多宿のルートに変更している。あるいは、江戸末期には討幕運動に活動



⑫ 須賀神社脇側道の中筋往還の碑

する人たちの往来も加わり、歴史に残る多くの人々が赤間宿に宿泊し、通過した。要するに、むなかた地域における唐津街道は、図7で明らかなように、大里、小倉からの諸ルートを經由して赤間宿に集まり、そこから原町、畦町を通過し、青柳（古賀市）へと向かった。一方で、玄界灘に沿った鐘崎や神湊、勝浦などの漁村から扇の要ともいえる赤間へ繋がることから、赤間宿は、むなかた地域の中心をなすまちでもあった。

2 むなかた地域の鉄道の整備

近世に終わりを告げると、それまでと相違し、明治新政府は、交通基盤として蒸気機関車を動力源とする鉄道の建設に力を入れた。また、物流の拠点をなす港湾施設整備にも重点を置いた。すなわち、従来からの様々に分岐する唐津街道に加え、鉄道が開設され、むなかた地域の発展に大きく寄与するとともに、地域の構図を一変させた。

鉄道は、周知のように、1872年（明治5）に東京の新橋と横浜間に日本で初めて開通したが、九州はそれより遅れて、1888年（明治21）に九州鉄道（株）が設立され、1889年に博多と千歳川間が開通した。

むなかた地域では、これに続いて、1890年に博多と赤間の区間が開通し、同時に赤間駅と福岡駅がオープンした。赤間駅は赤間宿から少し離れた西側の、江戸時代に土穴村（現在の宗像市土穴地区）と称した位置に設けられたが、赤間駅の今日の駅舎は3代目で、1982年に橋上駅に改築されている。

開通当時、博多と赤間の所要時間は1時間11分を要し、1日2往復で、運賃は24銭であった。1906（明治39）年当時の大工職の1日の手間賃が50銭であったことからすると、博多と赤間間を往復するとその賃金がなくなるほどで、高価だったことが窺える（宗像市史より）。1892（明治25）年度の乗降客数は、福岡駅41635人、赤間駅22970人である。当時の運行状態から、1列車当たり福岡駅で60人程度、赤間駅で30人程度の乗降があったと計算できる。

1907年（明治40）に国有化され、2年後に城山（じょうやま）トンネルが竣工、赤間と遠賀川間の現ルートが開設された。同様に、1913年（大正2）に旧東郷村に東郷駅が開設され、1931年（大正10）に博多と赤間が複線化され、輸送力が一層増強された。こうした近代における交通施設の整備に影響を受け、宗像の発展は唐津街道周辺地区から次第に赤間、東郷の鉄道駅付近に移った。なお、東福岡駅は、駅周辺の住宅開発に伴う住民の陳情で、1978年の開設であり、教育大前駅は、福岡教育大学が福岡市から移転したことで1988年開設されている。

3 明治時代以後の唐津街道、国道3号

一方、江戸時代から引き継いだ道路も、明治時代に入ると少しずつ変遷したが、特に第2次世界大戦後に激変した。むなかた地域で重要であった唐津街道と宿場まちは、唐津街道を受け継いだともいえる国道3号の整備に翻弄された。それをたどれば、

1885年(明治18年)の内務省告示の明治国道(国道34号日本橋〜福岡)
1920年(大正9年)の旧道路法施行の大正国道(国道2号日本橋〜鹿児島)
1952年(昭和27年)の新道路法施行の戦後国道(国道3号門司〜鹿児島)
そして今日の高速道路に並行する現代国道へと4段階の変遷がある。

明治時代の当初は、江戸時代の街道、脇街道をそのまま活用した。そして、1885年の内務省告示で、日本橋と福岡を結ぶ国道34号が定められたが、これは、旧東海道、山陽道を経て赤間(下関)から大里に上陸し、長崎街道の木屋瀬を経て赤間、古賀を通り福岡に至るもので、むなかた地区の唐津街道はそこに含まれた。なお、木屋瀬から長崎までは、日本橋〜長崎間で、旧長崎街道そのものを含み国道4号とされ、鎖国時代



⑬ 国道3号 むなかた地域 (福津市八並、宗像市村山田)



⑭ 中筋往還で鞍手、直方方面を望む現在の県道29号 (直方宗像線) (宗像市赤間) (かつての唐津街道)

の名残であったといえよう。

ついで1920年、旧道路法が施行され、東京、鹿児島間が国道2号となり、門司、小倉、粕屋郡新宮町と通過したが、それが福岡から熊本へ延びる一方で、遠賀川沿いの長崎街道は国道から外された。したがって、むなかた地区の唐津街道に限れば、戦前までは江戸時代からのものが維持され、良く残る状態であった。

しかし、終戦後の1952年、新道路法が制定され道路の本格的な整備が始まった。門司を起点に、小倉、福岡、熊本を南下し鹿児島市に至る九州の基幹道路・国道3号ということに変わりはないが、その後の経済成長、モータリゼーションの進展に伴い、各地でバイパスが整備された。このため唐津街道の多くの区間が次々に改変され、家屋が連なる宿場まちは区間は旧道となり、取り残されるように幹線道としての機能を失った。例えば、むなかた地域の場合、当初の国道は現在の主要地方道69号となり、その後、当該地域の前後の区間でみれば、戸畑、遠賀バイパス、そしてむなかた地域を通過する岡垣、宗像の両バイパスをへて、香椎バイパスの建設が進み、概ね4車線の国道⑬が整備された。

本章1節に述べたように、むなかた地域には、赤間、原町、畦町の3つの宿場まちはあったが、唐津街道に平行するもそれらの密集したまちを避けるようにバイパスが整備された。このため、バイパス沿いに大規模商業施設、飲食店が立地し、かつての宿場まちはの商機能や飲食機能、流通機能などが吸い取られ、交通量も激減した。あるいは、宿場間における一部の高台や原野、田畑では大規模な住宅団地の開発が進み、街道を寸断した。確かに、狭い旧道の通過交通を減らし、交通の安全と円滑化の上で目的を果たしたが、宿場まちはバラバラに切り離される結果を招いたといつてよい。

加えて、1970年代の中頃に、山陽新幹線および九州自動車道が開通。それらがまた、むなかた地域に強く影響した。関門海峡の早瀬瀬戸を渡り北九州市の門司に達した両者は、小倉駅または小倉東ICを経て、皿倉、帆柱山、あるいは福知山、金剛山といった山々をくぐり抜けて木屋瀬に達し、隣り合って遠賀川を渡り、鞍手、宮若、古賀から福岡に至った。このルートはむなかた地域の南の境界をなす山々(標高200〜300m)を超えた南面を通過。つまり、むなかた地域にはいずれも直接の駅、インターチェンジはない。最寄り駅は小倉駅および博多駅である。高速道路への出入りは宮田スマートIC、若宮IC、古賀ICの3者だが、これらは一山超えた隣の市町にあり、旧唐津街道地区とは距離にして約7km離れている。このため、3頁に述べたように、両交通機関を利用する上で特に大きな問題はないものの、国内外の広域拠点、工業や流通関連よりも、大都市郊外における住宅や教育、地域文化、バイパス型商業、レクリエーションなどで注目を集め、緑と海に囲まれるむなかた地域へと性格が変わった。合わせて、むなかた地域の交通体系は、高速道路各IC、内陸の国道3号、沿岸域を周回する国道495号が地域外に通じる基軸をなし、それらの間を幾本かの県道⑭が繋ぐ状況に変化した。

た。そうした中で、宿場まちは昔懐かしいオールドタウンに変身し、必死に踏みとどまっているのが偽らぬところである。
なお、沿岸部を周回する国道495号は、それまでの県道が国道に昇格(1993年)したものである。

三 唐津街道の宿場ま

ちと周辺を訪ね行く

江戸時代から明治時代にかけて赤間宿を核にした赤間村(図1)があった。この旧赤間村は、神武天皇が東征で岡湊(現在の芦屋)に着いたとき、八所宮²⁶(宗像市吉留)の神が赤い馬に乗って迎えたとの伝説があり、そのことに由来し赤馬と呼ばれ、転じて「赤間」と称される地名になったといわれている。その赤間と隣接地を一带として、図1の吉武・赤間・河東のエリアを赤間地区と呼べば、唐津街道の新延(鞍手町)から宗像市北の境界に沿って城山(じょうやま)、金山から孔大寺の山地とその麓一帯であり、釣川を挟み宗像大社の対岸をなす地区である。その中にあって、吉武は、八所宮の吉留とそれに続く武丸が一緒になったエリアであり、赤間宿は唐津街道にある筑前国二十一宿の中でも重要な宿場まち、河東は白山城があった山田地区から宗像大社と釣川を挟んで右岸一帯のエリアで、吉武(八所宮)―(3km)―赤間―(5km)―河東(山田)の繋がりである。

1 赤間宿地区を訪ねる

小倉に行くには木屋瀬宿方面や芦屋、若松方面に行く諸ルートがあり、その分岐点にあった赤間は、旅籠や商家などによる宿場まちとしての機能が整い、また、地域の



15 赤間宿の御茶屋のイメージ図



図8 赤間宿



16 五郷西遷之遺跡の碑

役所や民家が集積していた。江戸時代後期、日本地図の測量で訪れた伊能忠敬は、日記に、赤間宿のことを「町並人家続き、家一五六軒」と記している。加えて、芦屋、波津、鐘崎、神湊、勝浦、津屋崎、福岡の七つの港とはいずれも3里程の距離にあり、七浦三里の要をなした。

この赤間宿について、明治新政府に移行した明治初年の従業者の状況を見ると、商業従業者が約300人、工業約50人、農業約30人である。卸業、小売業主体の集落で、宿場まちであると同時に、筑豊地域との商易やむなかた地域での販売、流通、消費の中心地でもあった。

1872年(明治5)の赤間村は、197戸で、人口は987人(宗像市史)、1889年には1323人と増加。明治時代に入っても赤間地域9村の中で赤間宿に人口が集積し、明治の末頃の1989年には赤間町へと成長した。

a 赤間宿の行政施設など

赤間宿における施設を見ると、宿場の出入り口に構口があり、それに隣接して赤間宿の氏神である須賀神社¹⁷(江戸時代は祇園社とも称した)が鎮座している。その上で、宿場まちに様々な施設があったが、公的な行政施設などについて主なもの列挙すれば次のとおりである。

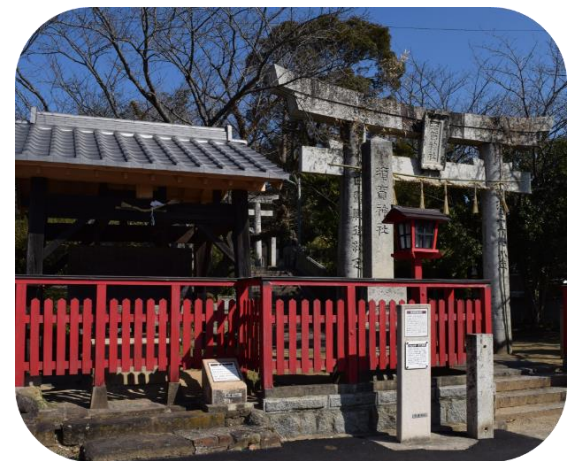
表2 むなかた地域の主な名所・旧跡 (1)

地区	名所・旧跡・公園等	住所（宗像市）	電話(0940)
赤間	八所宮	吉留3186	33-4467
	平山天満宮（無人）	吉留960	
	グローバルアリーナ	吉留46-1	33-8400
	伊豆本店（老舗酒造）	武丸1060	32-3001
	勝屋酒造（老舗酒造）	赤間4-1-10	32-3010
	街道の駅 赤馬館	赤間4-1-8	35-4128
	城山（宗像大宮司の居城）	陵巖寺	
	むなかた物産市オアシス	赤間くりえいと2-2-8	39-7700
	五卿西遷之遺跡碑	赤間6-1	
	須賀神社（無人）	赤間6-6-7	
	節婦お政の碑	（須賀神社内）	
	石松林平・伴六の碑	（須賀神社内）	
	出光佐三展示室	赤間5-1-3	26-0085
	出光佐三の生家（無人）	赤間4-11-28	
	出光邸（蛭子屋、兜造り屋根）	赤間5-1-17	
	出光万兵衛生家	赤間5-1-19	
	石松邸（橋口屋、明治前期）	赤間3-3-12	
	石松邸（鳶屋、兜造り屋根）	赤間2-4-17	
	萩尾邸（新屋、江戸後期）	赤間3-4-7	
	吉田邸（明治初期）	赤間3-3-7	
	辻井戸（須賀神社内）	赤間6-6-7	
	辻井戸（赤間構口側）	赤間	
	JR赤間駅（明治23年開業）	赤間駅前1-1-1	32-7120
	ふれあいの森	河東2354	
	法然寺（天正3年創建）	赤間6-1-1	32-3229
	浄万寺	赤間4-6-1	32-3172
	山田地蔵尊増福院	山田700	33-8287

- 御茶屋⑩ 黒田藩の別館で、諸大名や幕府の役人が泊まる本陣。
- 制札場 藩からの告知、宿場の人馬賃等の掲示、宿場間距離を示した。
- 御茶屋奉行所 御茶屋の管理や使用する大名の送迎のための馬廻組の藩士と、その下の役人である下代が駐在した。
- 町茶屋 脇本陣で、大名以外や一般の人々も泊まれた。
- 郡屋 藩からの伝達があった場合に郡奉行、代官・下代、各村の大庄屋、庄屋、組頭等が集まって会議を開く施設。
- 御用米倉庫 郡屋に隣接した黒田藩の御用米の倉庫。
- 問屋場（人馬継所）⑪ 輸送や運搬を取り扱う施設で、人馬の手配や飛脚を運ぶ荷物等を扱った。
- 庄屋 流通等の要の部分に当たり、その全体的な把握と管理の必要性から、問屋場に隣接して立地した。
- 辻井戸⑫ 人馬や旅人等の飲み水を供給。

b 赤間宿の町割りについて

こうした諸施設からも、赤間宿は、本格的な宿場としての機能に加え、峠越えながら岡垣や鞍手郡を含む近隣地域を商圏に含み、流通、小売業等の商業関係者がまた多くを占めたことが推測できる。



⑬ 赤間宿の総鎮守府・須賀神社

図8に示すように、九州自動車道の若宮ICから県道75号を進めば赤間のまちに入る所で県道503号とクロスし、そこからJR教育大前駅の方角に進むと、やはり県道29号と交わる。この間の約500m区間が赤間宿の本通りである。その本通りに沿って町割りが行われ、JR教育大前駅側の芦屋往還への東構口側からいえば上ノ番、上中ノ番、下中ノ番、下ノ番の区分である。

その中で、上中ノ番と下中ノ番の間に県道75号と直角に本町方向に延びる道があり、それに沿って郡屋、黒田藩の藩御用米倉庫、下代屋敷、およびそのすぐ近くに御茶屋が並んでいた。また、それらの前の道は、一方で猿田彦神社に繋がるとともに、他方で県道若宮玄海線75号に接続し、それから陵巖寺地区や平等寺、山田を通り抜け、鐘崎に至るが、庶民の生活道路として古くから用いられてきた。

c 赤間宿の建築物の形態

建築物の形態は古い町屋が幾つか現存し、それらから、間口が狭く奥行きが長いようなぎの寝床型であったことが分かる。また、壁面は漆喰を施した白壁や蔀戸（しとみど）

があり、千本格子風の障子戸がある。大行列を意識してか、二階から見下すのを避けるために、二階の窓を小さくした兜造り屋根(⑳、㉔)の町屋が、街並み風景に花を添えている。現在でも、写真のようにいくつかのそうした建物がみられ、当時の街の姿をイメージしながら歩くことができる。

d 赤間宿の名所・旧跡を訪ねる

本地域の名所・旧跡のうち、江戸時代の唐津街道における赤間宿のまちの構図と行政機関を前項までに紹介した。そこで、それらについては名称を挙げるにとどめ、これに民間の建物を加え、また宿場まち周辺の施設を含めた街歩きについて述べよう(図1参照)。

芦屋方面の北側から南下し、JR教育大前駅(1988年開設)からJR鹿児島本線の跨線橋を渡り唐津街道に入ると、赤間宿と記載されたモニュメントの門柱が目に入る。それを南に進めば、左に「須賀神社」⑰がある。赤間宿の入り口で、須佐之男命を祀り、鬼門を守護する神社である。あるいは、境内には貴船神社、菅原神社などいくつかの境内神社と共に、旅人や馬への給水のための辻井戸、農村の振興に努めた「石松林平・伴六の碑」や「節婦お政の碑」などがある。

碑文によれば、石松氏は、徳重村(現在は赤間地区に含まれる)の篤農家で村役を務

めたとある。また、天保の飢饉(1830年代)では救済のために宗像米を貸し出し、1854年には許斐山の山頂に鐘を引き上げ、時報を報じたことである。節婦お政の碑は、父親が決めた許嫁と、育ての親姉夫婦が勧める大庄屋の息子との縁談で悩んだお政の「わが身ひとつかくご極め参せ候」との遺書を残し自殺したこと

を憐れんでの碑である。これらを見てみると、今日でもニュースで伝えられる内容と変わりはなく、新聞、テレビなどの原点をなすといつてもよい。

原町方向に進むと、県道29号と交わり、その角に1573年

(天正3)創建の法然寺があり、

すぐ横に「五卿西遷之遺跡」と刻

む石碑⑱が建っている(一口メモ

(9)参照)。幕末の尊皇攘夷派の

三条実美ら五卿の公家が、政変で

京の都から追放され、関門を経て

洞海湾の黒崎の湊に上陸。そこから

太宰府に向かう途中で、赤間宿

に滞在したのを記念しての碑で

ある。また、これを世話したのが福岡藩勤王党の志士として活躍し、宗像市吉留にいた

早川勇である(一口メモ(10)参照)。

碑から道路を渡り南に進めば、左手に海軍兵学校校長と舞鶴要港部司令官を務めた出光万兵衛の生家があり、江戸中期の建物で兜造りの屋根を持つ「出光(蛭子屋)」および制札場跡がある。また、相對峙する向いに出生佐三の生家㉒がある。

出生佐三(1885~1981)は、石油の輸入・精製を手掛けた出光興産(現在のENEOSの前身)の創始者で、戦後復興に活躍した商人、経済人であるとともに、宗

一口メモ(9) : 「五卿西遷之遺跡」の碑

赤間宿で特記できるもので幕末に尊皇攘夷論の公家の三条実美らが八月十八日の政変(1863年)で京都を追放され太宰府に移送される途中に本宿場の御茶屋に25日間滞在した。この期間中、地元出身の早川勇や勤皇の志士との交流がみられたが、それを記念する五卿西遷之遺跡碑が直方宗像線県道29号と県道若宮玄海線75号との交点に建てられている。

一口メモ(10) : 幕末の志士・早川勇(1832~1899)について

早川勇は、医師早川家の養子となり宗像市吉留に居住した医者であったが、幕末、福岡藩内の佐幕派と勤王党との争いの中で、月形洗蔵ら勤王党の志士との交流を深め、明治維新に向けた討幕運動で活躍した。

吉武地区コミュニティーセンターの前にある早川勇顕彰碑の解説によれば、「早川勇は、幕末から明治へ、高杉晋作、西郷隆盛、中岡慎太郎、平野国臣、野村望東尼、等と結び歴史を動かした志士の一人」とある。

坂本龍馬の仲介で薩長同盟(1866年)が成立したことはよく知られているが、早川は、その3年前から、そうしたことの重要性を説き先導した。また、三条実美ら五卿の太宰府への西遷に奔走し、その途次、赤間宿の御茶屋(本陣)に25日間逗留したが、それを世話した。従者や、長州藩をはじめ諸藩の護衛など合わせて100名を超える随行があり、あるいは、薩摩藩の西郷隆盛が早馬で駆けつけ、尊王攘夷の志士たちが多く訪れたといわれている。

しかし、福岡藩では、その頃に佐幕派が力を盛り返し、「乙丑(いっちゅう)の獄」で勤王党の志士達は弾圧を受け、とらえられて切腹や斬首などに処された。早川も連座し閉門に処せられたが、その間の1867年、薩長に対し討幕の命が下り、遂に王政復古の発令が発せられ、早川も開放された。顕彰碑横に

国の為 ふかき心をつくしかた 身はよせかへる 波にまかせてとの歌碑がある。

維新の後、奈良府判事や元老院大書記官を勤め、晩年は東京で郷里の若者が集うための宗像郷友会を設立し力を尽くした。



⑱ 唐津街道 赤間宿の辻井戸



⑲ 赤間宿の問屋場跡

像大社の復興にも尽力したことで知られている。百田尚樹の小説「海賊と呼ばれた男」（2012年）のモデルとなったその人だが、佐三が語った言葉として残るものを二三挙げれば、「逆境の時に立てた計画は堅実で間違いない」、「何をやるにしても考えて考え抜く。それが私の一生である」がある。あるいは、「いくら大学を出ていても困難を克服して、試験を乗り越えなければ何にもなりませんよ。人間が先であります。」「盲」が先で「教」が後である。それだから「教育」という言い方が間違いで「盲教」といったほうがいい」とも。まじめな努力の人物をうかがい知ることができる。

さらに進むと出光邸（枡屋）があり、そして本街道と直角に交わり、玄海灘に突き出る鐘崎港方面に向かう通り（古代の往還）となる。b項で述べたように、右手に御茶屋奉行所跡、下代役宅跡の案内があるが、それらの建物は現存しない。隣接して許斐岳城主の占部氏が開基した「淨万寺」があり、道を挟んで反対側に郡屋跡がある。

本通りにもどると、枡屋の先の角からすぐに赤間宿の観光案内所とお食事処赤馬館⑳がある。そして、これに並ぶのが1790（寛政2）年創業の勝屋酒造㉑で、城山の水で造られた酒で知られている。近くに人馬継所跡、少し南西に下ったところに辻井戸㉒、さらに進むと本宿場の特徴である兜造りの屋根を持つ「石松邸（橋口屋）」㉓が建っている。



㉐ 宗像市東部観光拠点施設の赤馬館（街道の駅）



㉑ 宗像市赤間にある勝屋酒造の酒蔵まつり。主屋や煙突は国登録の有形文化財で見学可能。（宗像市赤間）



㉒ 赤間宿にある出光佐三の生家（宗像市）



㉓ 赤間宿の古民家1

造っていた「石松邸（橋口屋）」がある。あるいは、明治初期の建物で建具の家具製造販売をしていた吉田邸が挙げられる。

そして、構口に至るが、その直ぐ傍の釣川辻田橋のたもとに石柱が建っている。何だろうと近寄ると、「釣川定石一番」と刻まれている。釣川は天井川で、江戸時代中頃しばしばの洪水に悩まされ、その対策のために、当時の郡奉行指揮のもと、延べ26000人を要して9.6kmに及ぶ浚渫工事を行い川幅が広がられた。その際に設置された10本の定石の1番目のことで、今ではこれのみが残されている。

e 赤間宿の周辺を巡る

赤間宿の周辺に目を向けると、須賀神社から主要地方道である県道29号があり、吉武地区へと進むと、「平山天満宮」に至り、福岡県指定の天然記念物の三又の大楠がみられる。また、同じ吉武地区に、本章の冒頭に述べた「八所宮（はつしよぐう）」㉔がある。伊邪那岐命・伊邪那美命など神代4夫婦神8柱が祀



②⑥ 八所宮 (宗像市吉富)



②④ 赤間宿の通りの古民家2



②⑦-1 グローバルアリーナ(サッカー場) (宗像市吉留)



②⑦-2 グローバルアリーナ(陸上施設) (宗像市吉留)



②⑦-3 グローバルアリーナ(宿泊施設等) (宗像市吉留)



②⑤ 赤間宿兜造りの屋根 (宗像市赤間)

られていることから、社名の由来となったとある。創建は飛鳥時代の674年で、相当の昔からあり、遣唐使が航海の安全を祈った、小早川隆景が太刀を奉納した、などと伝えられている。4〜5月のツツジや藤棚の頃、および秋のご神興祭に沢山の人が訪れ、人気のスポットである。

県道29号を鞍手町方向に進むと、道路沿いにラグビー、サッカー、陸上競技場等のスポーツ施設や、宿泊施設、ショップがみえる。総合多目的施設の「グローバルアリーナ」②⑦であり、社会人、大学生、高校等の運動クラブや近隣の市民の利用が多い。

あるいは、県道75号にもどつて北へ進み、県道291号に入ると、白山城の麓の山田地区に至り、「山田地蔵尊増福院」がある。増福院は宗像大宮司家の神護寺であるが、1551年、宗像大宮司氏男の正室で家督争い(二口メモ(3))における山田御殿の大惨事)に巻き込まれ暗殺された菊姫様など6人の女性の御霊を祭る地蔵尊があり、宗像氏関連の品々が伝えられている。安産や子育てを願う人々が多数訪れるが、4月の花祭りがある。また、春の時期の山桜とソメイヨシノの見物でも賑わっている。

山田の西隣の河東地区の「ふれあいの森」は、総合公園で、四季を通じて市民の憩いの場であるが、そこから県道291号、くりえいと通りを南下して土穴地区に向かえばJR赤間駅に至る。現在の駅舎は橋上駅だが、最初のものは1890(明治23)年に開設され、九州における鉄道の歴史に1ページを刻むと共に、急速に進んだ現代の地域発展に大きく寄与した。

表3 むなかた地域の特産品(1)

地区	品名	取扱店	住所(宗像市)	電話(940)
赤間	赤間そば御膳	街道の駅 赤馬館	赤間4-1-8	35-4128
	ヤギシタハム詰合せ	むなかた物産オアシス	赤間くりえいと 2-2-8	39-7700
	カジュアルフレンチ	お菓子工房&Café 棕の木ムック		
	ブルガリアのはちみつと ローズジャム	グローバルアリーナ (ショッピングの森)	赤間2-4-32	32-8998
	アーモンドラスク	グローバルアリーナ (グリーンガラスベーカーリー)		
	宗像産「あなごめし」	寿司割烹 ふく仙	吉留46-1 三郎丸6-3-12	33-9252 32-6277
	もつ鍋、地鶏鍋	居食処 高田	丸昭第一ビル1F	
	スフレケーキ	スイーツ工房BENY	赤間駅前1-2-5 赤間駅前1-9-1-1	32-1515 36-9068

表4 むなかた地域の宿泊施設(1)

地区	宿泊施設	住所(宗像市)	電話(940)
赤間	赤間ステーションホテル	赤間駅前1-2-6	32-0400
原町	チサンイン宗像	光岡992-1	36-8211
神湊	宗像リゾートホテル	神湊651-2	62-4826
	魚屋別館	神湊643	62-3355
	高嘉旅館	神湊454	62-1221
	玄海旅館	神湊485-7	62-0001
	ホテルグレイージュ	神湊600	38-7700
	はなわらび	江口518-1	62-0107
	みなと荘	神湊1250-66	62-2265
	松風荘	神湊1250-13	62-0120
	華杏 弥太郎	勝浦530-2	62-3282
鐘崎	ロイヤルホテル宗像	田野1303	62-1600
	民宿しらいし	鐘崎619	92-1149
大島	民宿ふじ島	大島695-1	72-2631
	三好屋旅館	大島1051-1	72-2003
	民宿つわせ	大島2432	72-2015

f 赤間宿地区の特産品、食など

少しでも参考にと特産品や食などを紹介するが、詳しくは赤間宿などの観光情報を発信、案内している赤馬館²⁰で聞くとよい。赤馬館でも食事処があり、赤馬御前そばなどが振る舞われている。また、JR赤間駅近隣の北西側にある「むなかた物産市オアシス」は、減塩、無添加で健康志向のハム詰め合わせが人気である。

赤間宿の赤間構口の近くで、唐津街道(県道503号)の西側の裏通りにある「菓子工房の棕の木ムック」は洋菓子とカフェとレストランが融合した点で特徴があり、食の味わいの提供と同時に憩いの場でもある。

前述した「グローバルアリーナ」では、その本来の施設のみでなく季節に合わせたイベントが行われ、特にブルガリアの人々の演奏会が有名である。合わせて、施設内の「ショッピングの森」にあるブルガリア直送のオーガニックな蜂蜜とローズジャムが、また、施設内の「グリーンガラスベーカーリー」のアーモンドラスクが人気である。

一方、JR教育大前駅とJR赤間駅の中間に位置し、JR鹿児島本線をはさんで北側にある「寿司割烹ふく仙」は宗像産の穴子めしが味わえ、逸品である。さらに、JR赤間駅前の北側の「居食処 高田」は地鶏ともつ鍋および活魚を提供する人気店である。

3 間の宿・原町地区を散策する

同様に、JR赤間駅前にある米粉・工房「穂の香」は、宗像と福津産のお米でパンを作るユニークな店であり、若い人に人気のある「スイーツ工房 BENY」はカスタードとクリームチーズを練り混ぜたスフレケーキがおすすめである。

要するに、宗像市には田園都市を生かし、憩いの場であると共に、地産地消の店など地元ならではの飲食店や食事処が点在し、名所旧跡めぐりの合間にしばしの休憩を楽しむことができる。

ついでながら、前述の「勝屋酒造」は主屋が国登録有形文化財である。この酒造のお酒は玄海灘で獲れる海の幸と辛口の本醸造酒・沖ノ島が良く合うといわれているが、上撰の樽の露などがある。他に、老舗の酒蔵として、直方宗像線の県道29号沿いの武丸に、1717年創業の「伊豆本店」がある。やや辛口の清酒・亀の尾が推奨である。

以上に述べた特産品などは表3にまとめるとおりであり、また、主なホテル等を表4に示す。これらは執筆時のもので、事前の確認が必要なことをお断りする。

原町は赤間宿から博多・福岡に向かう唐津街道を5kmほど進んだ所にあり、赤間の宿と畦町宿との間に位置している。前述したようにその成立は江戸時代における宗像郡内の光岡村(後に周辺の村と合併し宮田村となる)と野坂村の集落にもとるが、本来の宿場ではなく、泊ることが認められない非公認の宿場であり、「間の宿」(あいのしゆく)、あるいは「間の村」(あいのむら)と呼ばれるものであった。宿場と宿場の間の休憩所として用いられた。

その後、1911年(明治44年)における明治の大合併で、野坂村と宮田村の2つが合併し南郷村(現在の南郷小学校の校名の由来)となったが、さらに1954年の昭和の大合併で宗像町になり、南郷村の名称をもつ自治体はなくなった。

a 原町地区の名所・旧跡を散策する(図9)

原町を、畦町方向に向うと、宿場の外れに集落の総鎮守としての原神社があり、1855年建立とのことだが、小山の上から許斐山を向きつつ、原町を見守るように建っている(図9)。その行事に元旦祭や御祇園祭が行われている。そしてさらに進めば、県道92号の原町交差点で、そこからが原町宿²⁸で、和風なデザインの家屋があり、恵比寿神社や籠立場などの跡が残る。

小さな集落ではあるが、1758(宝暦8)年に転住してきた有吉善三郎の家は代々

之の鐘楼堂の寄進があつた屈指の寺であるが、3千本のつつじが有名で、4月末には多くの見物客で賑わっている。馬頭観音はこの寺の裏にあり、奈良時代の高僧行基の秘仏が治められている。33年に2回のみ一般に公開され、通常はみることができない。次の開帳は2023年とのことであり、機会があればその時に合わせて訪れるとよい。

また、宗像市と福津市の境界近傍で国道3号の直ぐ南側に標高270mの「許斐山」③⑥がこぶ状をなして横たわっている。ここは宗像大宮司の第15代宗像氏平が1131（天承元）年に許斐岳城を築城し、姓を許斐と改名し根城としたところである。その後、1529（享禄2）年に、重臣の占部豊安は廃城になっていたこの山を再興し、縁の山城に造りあげた。現在は市民をはじめトレッキングの愛好家などに楽しまれ、頂上から北側一帯に広がる玄界灘やむなかた地域を見渡すと眺望がすばらしく、表紙の写真はそのシーンである。

b 原町地区の特産品および食など（表6）

特産品直売所「とれとれプラザかのこの里」は、地元産の農産物を主に販売し、とれたての新鮮な野菜、果物等が人気で、地産地消そのものである。また、「街道そばたからい」は先に述べたように築後150年の古民家であり、その庭を眺めながら、落ち着い



②⑧ 唐津街道・原町。後ろの白い建物が旧南郷村役場（現米倉病院）



②⑨ 唐津街道原町の旧眞武酒造（現在は蕎麦屋）



③① 中村兄弟画伯生家の中村邸（宗像市原町）



③② 昭和初期の建物（商店で丸正本店の看板がいまなお残る）（宗像市原町）



③③ 古美術楽市楽座（眞武酒造分家）、（宗像市原町）



③④ 唐津街道 原町の銘石（宗像市原町）

た雰囲気や蕎麦三昧コースなどの創作料理を楽しむことができる。店の敷地内の蔵には古布、木工等のギャラリーの「ならびや」がある。また、「楽市楽座」では、骨とう品や古美術をあさることができ、隣接して「木目込みてまり真子」、マルヒチの「宗像精肉店

(旧造醬油屋眞武邸)が並ぶ。やや離れた一般国道3号沿いには「玄海井丸の宗像店」がある。これらは、赤間宿から畦町に向かってウオーキングするときのつかの間の立ち寄り先になるであろう。

4 畦町宿地区 に立ち寄る

大規模な住宅団地を除くと、かつての福岡町地区(福津市)には、小山を縫うように谷筋があり、時には猪やシカが出没するも長閑な田園集落と風景が展開していた。そうした中で、この地区の見どころは、唐津街道沿いの古い集落が残る畦町宿である。福岡駅からバスやレンタサイクルによるアクセスも可能だが、タクシーで10分ほどであり、車なら国道3号の上西郷ランプから県道30号に沿って進み、県道503号へ入ったすぐのところである。

さて、先に紹介した赤間宿側から唐津街道沿いの県道503号に進めば、原町を通過し、宗生寺を過ぎ



③④ 唐津街道：畦町宿の古民家 (福津市)

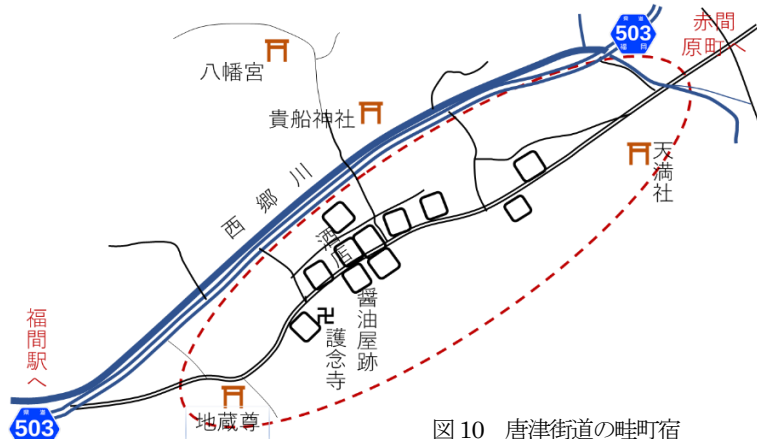


図10 唐津街道の畦町宿



③⑤-1 左の古民家はあぜのまち絵本美術館、右赤れんがは寺



③⑤-2 唐津街道畦町宿の通り (福津市畦町)

神興神社縁起
祭神宗像三女神(天照大神の御子神)
多紀理姫命
市杵島姫命
多岐都姫命

神興神社は往時より斯の地に御鎮座あり十一部落即ち上西郷下西郷久米津九手光村山田八並本木畦町内殿(舍利威の住民に依り祭祀を奉行す例祭す言)宗像社縁起に曰く宗像三女神初め室木の六ヶ敷に御着その後此の地に留り給う此の村に於て神威輝耀を以て神興を言すその後三所の靈地田島(大島)沖ノ島に御遷座あり云々である。

その三所に遷り給る後この地にも御社殿殿が建てられ祭祀も盛なりと云々然れども何れの頃か兵乱に遭い御社も崩壊せしが村民主と云う者に夢の御告りあり小祠を営めりその後早應四年に祈願すれば靈應ありて隣村民力を合せ石祠を建立す

大正年間古瓦発見され鑑定結果延喜寺年の銘あり吾が国で二番目に古い瓦と解りこの神社の往時の社大なるを感ふ。

昭和五十五年十月吉日建立
(平成十四年七月吉日再建)

神興神社氏子会

て福津市に入るところの山ノ口峠を越えて下るところに太閤水と記した井戸がある。1857年の九州征伐で、豊臣秀吉が20万の大軍を率いて乗り込み、峠を越えての休憩に際し、千利休が地元の案内で水を秀吉に献上したところ大変喜んだことから太閤水と呼ぶようになったといわれている。そこを過ぎれば503号の旧道をなすように山裾へと枝分かれし、西郷川を渡ったところから始まる集落がある。それが畦町宿である。赤間宿から約4里、青柳宿からも約4里と離れていたこの地に、1642年(寛永19年)、昼食や休憩するために隣村から人家を移し設置された。

宿場まちの延長は約500mで小規模だが、1846年(弘化3年)当時、人口578人、戸数160戸であった。原町方面に当たる北側の構口から、菅原道真を祀る天満宮、番所、共同井戸、宿庄屋、郡屋(集会所)、そして御制札所があった。また、人馬継所があり、常時15頭の馬と駕籠が用意され、宿場人足130余名が詰めた。年貢米を納める本蔵が6棟建造され、それに関連する年貢米を計る役目の秤屋、宿屋、商店、酒屋、醤油屋、人足口入れ業などが立地し、南側の出入り口側の付近には寢屋もみられた。赤間宿で滞在した三条実美らの公家達も、峠を越えてここで休憩したが、その折り、

まちを挙げての大騒ぎになったと伝えられている。

今では、新しく建てられた家屋が多いが、ところどころに100年近く経過する古民家³⁴、³⁵が見られる。しかし、それらも老朽化が進み、歯が抜けるように少なくなりつつあるのが実態であり、今後どう維持するかが課題である。

福岡駅と畦町との中間で、唐津街道から少し寄り道になるが、東福岡駅から南に1km下ったところに福岡東中学があり、その前の県道531号沿いに隣り合って神興（じんこう）神社（福津市津丸）がある。宗像三女神を祀る小さな社殿があり、その奥に簡素な石の祠があるに過ぎない。しかし、道端の縁起に記される看板は写真³⁶下の通りである。一章1節に加えてこれをどう理解すればよいかはいまのところ確たる根拠はない。確かに鞍手郡鞍手町室木の六嶽神社の由来に宗像三女神が崎戸山（六ヶ嶽の古称）に降臨されたと記され、また神興神社近くで古い瓦が発見されている。しかし、それ以上のものはなく、今は神話ロマンに思いをはせつつ、放生会や雨ごいが催される村の鎮守様として祈るのみである。

続いて、県道をさらに南下すると、ほどなく「なまずの郷」の案内板があるので、それに従うと県道30号との交差点となり、それを突つ切りさらに600m南下すれば、庭園や芝生広場に加えて、ゲートボール場、テニスコート、野球場などを備えた広大な公園（約14万³㎡）がある。こうしたところで十分に手足を伸ばし一休みするとよいであろう。

四 むなかた地域の

沿岸域を回遊する

宗像大社に関わる直接的な遺跡は、宗像市に加えて福津市の勝浦地区を含めた広い範囲に分布し、また、関連する津屋崎の歴史遺産や唐津街道でつながる宿場まちなどを含む範囲とも関係がある。このことから名所・旧跡等を巡るにしても、そうした範囲の遺跡などについての状況を理解し、必要に応じて、より道をするのが望ましい。そこで、



36 許斐山（中世の許斐氏の居城）（宗像市王丸）



37 宗像大社三女神の説明板
宗像大社辺津宮境内（宗像市田島）

前章までに述べてきたことを除いて、むなかた地域の唐津街道沿い以外の地域、つまり、国道3号より玄界灘側の地域における見どころを次の3地区に区分して示せば以下の通りである。

東郷地区（日の里、久原、田熊、王丸）

田島・神湊地区（田島、深田、神湊、江口、鐘崎、大島）

津屋崎地区（勝浦・奴山、津屋崎、宮司）

1 東郷地区に行く

東郷地区は、宗像市役所や県事務所がある中心市街地である。平安時代末期には、この東郷に南郷（野坂、宮田）などを含めた広い荘園があり（図1）、鎌倉時代には宗像氏とは別に惣地頭の中原親能（ちかよし）が赴任していた。中原親能は、源頼朝の側近で、鎌倉幕府十三人の合議制のメンバーの一人として活躍した御家人であり、貴族である。鎌倉に邸宅を構え、全国の広い範囲の所領所職についており、その一つとして筑前国も含まれていたが、その後、宗像氏大宮司の領地となった。

a 東郷地区における名所・旧跡と主な施設

表7 むなかた地域の主な名所・旧跡 (3)

地区	名所・旧跡等	住所 (宗像市)	電話 (940)
東郷	許斐山 (山城・許斐氏の居城)	王丸	
	田熊石畑遺跡公園	田熊2-12	
	宗像ユリックス	久原400	37-1311
	メイトム宗像	久原180	36-0202
	アクアドーム (総合フィットネスクラブ)	久原400	37-1377
	すすき牧場	河東1	32-6300

表8 むなかた地域の特産品 (3)

地区	品名	取扱店	住所 (宗像市)	電話 (940)
東郷	宗像牛の精肉	すすき牧場	河東1	32-6300
	炭火の肉料理	旬采ダイニング郷	稲元3-1-1	35-1995
	宗像産活魚、野菜、果物	かのこゆり	東郷2-2-21	36-7701
	四季の彩ミニ懐石	レストランみあれ	王丸474	37-4126
	宗像漁港産食材	いけす料理 史	田熊4-2-12	37-2222
	デザートバイキング	久原400	37-0161	
	森のレストラン女神のテーブル (宗像ユリックス内)			
	梅の実入りお菓子	菓子舗 鼓屋	田熊1-1-16	36-2073
	明太子屋の明太フランス	大丸770-4	0120-94-5356	
		辛子明太子 海千宗像本店		

現在の東郷、田熊、日の里などの一帯は、JR赤間駅から20年ほどたった後の1913 (大正2) 年に、「JR東郷駅」が設置され、それを機に駅周辺を主に行政施設や住宅が集まるようになり、都市化が進んだ。特に、鹿児島本線の南側から国道3号の間の区域は、戦後における高度経済成長期の1965年頃から、大規模な日の里の住宅団地が開発された。このことから、本地区にはさほどの遺跡は残されていない。

それでもよく見ると、紀元2世紀頃の弥生時代のものと思われる田熊石畑遺跡 (宗像市田熊2丁目) がある。墳丘墓、貯蔵穴と環壕、竪穴住居跡などが発掘され、現在は、歴史公園「いせきんぐ宗像」として公開され、古代を模した草花を栽培するなどの広場があり、弥生の趣を楽しむことができる。

一方、東郷駅地区と唐津街道の原町に挟まれる久原地区は、コンサートホール、多目的ホール、図書館、プラネタリウム等が入った文化と、スポーツの複合施設「宗像ユリックス」^{③⑧}があり、第37回全国豊かな海づくり大会の主会場に用いられ、フェスタが開催された。あるいは、これに隣接し、市民への情



③⑧-3 複合施設の宗像ユリックスのスポーツ施設アクアドーム (宗像市久原)



③⑧-2 宗像ユリックスの図書館、プラネタリウム、演奏会のホール等 (宗像市久原)



③⑧-1 宗像ユリックス施設内の遊歩道 (宗像市久原)

報発信や交流の場を提供する交流館「メイトム宗像」がある。道路を挟んだその向は「アクアドーム」^{③⑧-3}であり、温水プール等を備え、健康志向と相俟って市民の利用者で賑わっている。これから、久原地区は田園の中で複合施設が集積し、整備が十分に行き届き、豊かな田園都市をなし、市民との交わりを楽しむことができる。

b 東郷地区の特産品および食 (表8)

前述した「すすき牧場」は、宗像牛、コロッケ、ハンバーグなどを敷地内で販売しており、地産地消が促進されている。また、JR東郷駅のある東郷地区で、地元の漁師直送の活魚・鮮魚や農家直送の野菜等を食材とする料理を出す「かのこゆり」、その西隣の田熊地区にある和菓子専門の「菓子舗鼓屋」がある。

同区域の「いけす料理の史」は前述と同様に鐘崎漁港からの直送の活魚を食材に使用している。東郷の東隣の稲元における炭火焼きの肉料理「旬采ダイニング郷」もお薦めである。また、南方向に視線を転ずれば、JR鹿児島本線を挟んだ久原に、前述した宗像ユリックス内の「森のレストラン女神のテーブル」が施設利用者に食事やカフェ等を提供している。

国道3号沿いで日の里地区、久原地区の南側の王丸地区にある「レストランみあれ」は天然温泉と食事がセットで、四季彩りミニ会席が代表料理である。同じ地区の国道3号沿には王丸交差点傍の「明太子屋の海千」の明太フランスがあり、逸品である。

2 田島・神湊地区を巡る

田島・神湊地区は、宗像大社の辺津宮がある田島を拠点にして、大島の宗像大社を加え、さらに、本土側の港町・鐘崎を追加したところであり、概ね宗像市発足前の玄海町と大島村をまとめた範囲である。世界遺産「宗像大社」を中心としたものが一つの範囲にまとめられ、東郷駅から神湊への県道69号、神湊からさつき松原に平行する国道495号、県道300号に沿った田島、深田、吉田、神湊、江口、田野などの地区である。

表9 むなかた地域の名所・旧跡(4)

市	地区	名所・旧跡等	住所	電話 (0940)
宗像市	神湊	宗像大社辺津宮	田島2311	62-1311
		神宝館		
		高宮祭場		
		第二、三宮		
		鎮国寺	吉田966	62-0111
		桜京古墳	牟田尻	
		海の道むなかた館	深田588	62-2751
		さつき松原	江口	
		カナディアンキャンプ (乗馬クラブ)		
			神湊441	62-1912
	大島	なかの風の農園	田島宿ノ谷1759	090-8893-4243
		工房茶倫子 (おもちゃ家具製造)	田島952-17	62-2526
		浄光寺		62-3708
		宗像大社中津宮		72-2007
		沖津遥拝所		
		宗像大社沖津宮		62-1311
		御嶽山展望所 (標高224m)		
		風車展望所・砲台跡		
		うみのぐ大島 (海洋体験施設)	大島1822-4	72-2361
		九州オルレ宗像・大島コース		
福津市	鐘崎	沖ノ島の原生林		
		織幡神社	鐘崎224	
		鐘の崎活魚センター	鐘崎778-6	
		SR Showhorse stable 乗馬クラブ 上八2012-1		090-1973-9838
		新原・奴山古墳群	奴山616	
		宮地嶽神社	宮司元町7-1	52-0006
		東郷神社	市渡1815-1	52-0027
		津屋崎千軒なごみ	津屋崎3-17-3	52-2122
		津屋崎千軒民俗館藍の家	津屋崎4-14-20	52-0605
		畦町宿場跡	畦町	

a 田島・神湊地区の名所・旧跡 (図11)

田島地区にある宗像大社辺津宮 (⑧) の境内には、辺津宮と共に、沖津宮、中津宮の分霊をお祀りする第二、第三宮が鎮座し、また沖ノ島から出土した国宝を納めた神宝館神社の原点である高宮祭場がある (一章4節)。また、宗像大社の北隣は、宗像の過去、現在、未来の魅力を海の道をテーマに発信している世界遺産ガイド施設の「海の道むなかた館」 (宗像市深田) である。

そして、こうした宗像大社と釣川を挟んだ東側に渡れば、唐から遣唐使として806 (延暦25) 年に帰国した僧空海によって開山された「鎮国寺」 (ちんこくじ)。宗像市吉田がある。空海が第16次遣唐使船で唐に向かう途中、沖合で嵐に会い、宗像三女神に祈誓をたてたところ無事に唐入りがなかった。帰国後に「この地こそ霊地」とのお告げで建立したとの伝承があり、昔は宗像大社の神宮寺 (かつての神仏習合にもとづいて神社に付属して建てられた寺院) であった。九州八十八ヶ所霊場第八十八番結願所であり、九州三十三観音 (ぼけ封じ) 霊場の第一番札所でもある。毎年4月に花まつりがあり、



図11 宗像市の田島・神湊地区

同時に4月28日には火渡り柴燈大護摩供 (さいとうおおごまく) が無病息災を祈って修験者達によって行われている。そして、最後に一般の参詣者も参加できる行事が有名で、遠方から多くの見物人が訪れるところでもある。

県道69号に戻り、北へ進むと桜京古墳 (国の史跡) がある。6世紀後半の前方後円墳で、石室は装飾され、海人族に関わるものと推察され、一度は宗像大社の世界遺産の構成資産候補に挙げられたが、正式登録には至らなかった。

県道69号をさらに北へ進めば神湊港に突き当たり、大島、地島への船が発着している。神湊地区はその少し手前の国道495号沿いであるが、その見どころの一つは「さつき松原」 (③) である。釣川河口の北斗の水くみ海浜公園から鐘崎に向



④ 鎮国寺 (宗像市吉田)



③ カナディアンキャンプ乗馬クラブとさつき松原



神湊の街中にはいくつかの寺や神社があるが、その一つを紹介すれば、臨船禅寺が挙げられる。室町時代に建立されたものである。俳人・種田山頭火が宿泊したといわれ、山頭火生存中に建てられた唯一の句碑には、「松はみな枝垂れて南無観世音」と刻まれている。

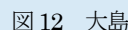
よりの「浄光寺」(宗像市江口)は、

この江口地区と反対の神湊よりには「カナディアンキャンプ乗馬クラブ」^{③9}があり、乗馬体験ができ、ビーチの景色と合わせて楽しみが倍加するであろう。

九州北部はおおむね響灘、玄界灘の海に囲まれるが、宗像市の鐘の岬、地島、大島、

沖ノ島を結ぶラインが響灘と玄界灘の境であり、そこに浮かぶ大島④の状況は一章節に述べたとおりである。大島村として長らく独立した自治体であったが、2005年に宗像市に編入され、現在は宗像市大島である。

大島における最も重要な見所は、港近くのユネスコ世界遺産に登録された「宗像大社中津宮」⑤および「宗像大社沖津宮遙拝所」⑩である。そこで通常は、港に到着すると、まずは中津宮の重要景観スポットにお参りし、その後、県道541号をメインルートにして、徒歩や港で借りたレンタルサイクル、あるいは路線バスを活用して回遊するケースが多い(図12参照)。



④① 夢の小夜島と岩場 (宗像市大島)

それにしたがえば、中津宮の後、沖ノ津宮遙拝所に行く途中、干潮時に浜と陸つづきになる岩場（干洲（かんす））があり、さらに鳥居、松、小島、砂浜を絵に描いたような「夢の小夜島」④の風光明媚な海浜光景を堪能することができる。小夜島の頂上には小さな祠があり、その手前の岩場ときれいに整備された砂浜の海水浴場がある（二章一節参照）。また、近くの大島交流館に立ち寄れば、大島の歴史や暮らし、世界遺産に関わる情報が入手可能である。そこから島の北へ1.4 km進んだところが沖津宮遙拝所である。天気が良ければ、沖合にかすかに浮かぶ沖ノ島が眺望でき、そこに向かって拝んだ後にさらに西へ2.3 km進むと、九州北部沿岸防衛のため構築された砲台跡（第二次世界大戦直前の1936年に築造）がある。そして、その横の少し離れたところに風車展望台があり、玄界灘海域の一角が眺望できる。

さらに、2.4 kmほどのところに大島灯台、海に突き出した馬蹄岩、三浦洞窟などの景勝地がある。馬蹄岩は、宗像三女神の一の神である田心姫（タゴリヒメ）神が沖ノ島に馬に乗って飛び渡った時にできた馬の足跡との伝説が語られる岩塊である。

三浦洞窟は、岩の割れ目のような状態で、灯台の横の急な崖の下にある。その昔、長崎から逃れてきたキリシタンの宣教師が隠れ住んだともいわれるが、そこを降りることは可能だが、注意が必要である。

御嶽山（標高224m）は島の最高峰。その登山道の入り口・風の峠から山頂へは約700mの山道であり、御嶽神社、御嶽山展望台がある。遠くは福岡市や壱岐、対馬が眺望できる。下りは、登りと反対の中津宮への山道をたどれば、道は急で注意が必要だがさほどの時間を要せず、出発点の中津宮に戻る。

中津宮から、西側に海岸伝いに少し歩いた海岸沿いに、「うみんぐ大島」がある。海洋

体験ができる施設であり、釣りをはじめ、海中観察、櫓漕ぎ体験などができる。

なお、九州オルレとして県内第1号に指定された「九州オルレ宗像・大島コース」(全長11.4km、4〜6時間がああり、案内標識があるので、ターミナルの観光案内所でパンフレットをもらいそれにしたがって歩くのもよいであろう。

c 鐘崎地区

西日本の海女の発祥の地といわれる鐘崎地区は、神湊の東側で、岡垣町と隣接した位置にある。万葉集の巻第七に

ちはやふる 金之三崎を

過ぎぬとも われは忘れじ

壮鹿之須売神

と歌われている。ちはやふる金之三崎は荒々しい鐘の岬のことであり、壮鹿之須売の神は志賀の皇神(すめかみ、一口メモ(3))のご加護をとの意味だが、その厳しい鐘崎の半島突端の小山の上に「織幡神社」がある。武内宿禰を主神とし、宗像大社の境外摂社で、神木であるイヌマキの木が裏山に自生している。

県道300号沿いにある「SR Showhorse stable」は乗馬クラブであり、神湊と同じように海を見ながらの乗馬体験を楽しむことができる。

鐘崎漁港の約4kmの海上に浮かぶ地島は、神湊港から定期船が出ている。江戸時代の1711年に、朝鮮通信使が台風のため避難したことがあるが、約6000本のヤブ椿が自生する島として知られており、毎年3月に椿祭りが開催される。また漁業で生計を立てている島であり、風景街道というよりも釣で人気が高い島でもある。

d 特産品および食など(表10)

田島地区

宗像大社からやや東郷よりに遡ったところの田島地区に「工房茶輪子」と言う家具の製造や木製オリジナルネームプレートを作り、販売している工房がある。また、この工房から宗像大社側に進んだ丘陵地にミカンを栽培している「なかの風の丘農園」がある。宗像のミカンは気候、風土の影響があつてか甘みが強いとの評判である。

表 10 むなかた地域の特産品(4)

地区	品名	取扱店	住所	電話(940)
神湊	自家製のそばと地魚のにぎりずし	升風庵	牟田尻1845	62-8282
	寿司と和食	末広	牟田尻1860-31	62-0023
	宗像産猪カレー	道の駅むなかた	江口1172	62-3811
	海鮮天井	三日月庵	江口光星原661	62-7700
大島	海の幸ランチ	民宿つわせ	大島2432	72-2015
鐘崎	和菓子	さかした製菓	鐘崎422-1	62-0732
	味付けぼんず	マルヨシ醤油	上八1540	62-3322
	ふぐカレー、天然ふぐ、あごだしのセット	鐘の岬活魚センター	鐘崎778-6	62-1570
津屋崎	地元魚介類料理	つやざき漁港食堂空と海	津屋崎4-47-18	52-5001

神湊地区

岡垣町の方から津屋崎に向かう海岸通りの一般県道300号が通り、この道路と宗像大社方面から神湊に向かう道路との交差点の手前に蕎麦処でありながら地物の魚と寿司も楽しめる「升風庵」があり、その斜め向かいの「末広」は、玄海灘の新鮮な海の幸を使った和食と寿司が好評である。

また、県道300号沿いで岡垣町方面に進み釣川を渡った直ぐ傍に「道の駅むなかた」内にあるおみやげ館に宗像産の猪を用いた猪カレーが販売され、さらに岡垣町方面に進めば、国道495号の沿道に古民家のレストラン「三日月庵」では一押しのお海鮮天井がある。

大島地区

島を周回するように民宿や旅館が点在し、合わせても数軒。いずれも素朴だが、味が勝負と新鮮な魚料理が堪能できる。

鐘崎地区

一般県道300号の沿線にある「鐘の崎活魚センター」は、タイ、イサキ、サザエなどの地元鮮魚の販売とともに、イカ鮮魚のパックや「ふぐ&あごだし」のセットが人気である。その近傍の和菓子専門店の「さかした製菓」は漁業中心の地区での和菓子店であり珍しい。県道300号を神湊方面に下ると「味付けぼんず」で知られる「マルヨシ醤油」がある。

3 津屋崎地区を訪ねる

福津市は、2005年、それまでの福岡町と津屋崎町が対等合併してできたまちである。図1でいえば、神興(宗像市に組み込まれた村山田区域を除く)、上西郷、下西郷の区域が旧福岡町で、宮地、津屋崎および勝浦が旧津屋崎町である。

現状をみれば、鹿児島本線の東寄りと福津市の南部が福岡地区で、それ以外の北部の玄界灘寄りの範囲が津屋崎地区であるが、東福岡駅と福岡駅の区間で線路を挟むように大規模な住宅団地が建設され、新住宅都市が形成されている。

こうした福津市の津屋崎地区における主な見どころは、国道495号線沿いの新原・奴山古墳群であり、勝山・津屋崎の塩田跡、宮地嶽神社、津屋崎千軒、そして福津海岸である。

a 新原・奴山古墳群と塩田跡

津屋崎も海外との関係において東アジアとの交流、交易の窓口であった。特に、中世

の我が国では陶磁器や銅銭などが重宝がられ需要があった。その流入は博多の日宋貿易に携わった南宋の博多商人(綱首)の手によるものであり、承天寺が運営したが、むなかつた地域とも深い関係があった。東アジアとは交易・交流が宗像大宮司側と同様に早くからあり、また、綱首一族とは姻戚関係をもち、宋との経済的、文化的な繋がりを示す文化財が津屋崎にも見ることが出来る。

その一つが、外国人が居留した唐坊の存在であり、現在の津屋崎小学校から大量の青磁器が出土している。あるいは、近世に入ると、筑前の国は黒田長政が領主となり、様々な政策を打ち出した。その中で、1605年(慶長10年)に出された浦掟に、むなかつた地域の福岡、津屋崎、渡、勝浦、神湊、大島、江口、鐘崎、地島の地名をみることが出来る。

〈新原・奴山古墳群〉

津屋崎に行くには、福岡駅からバスやレンタサイクルもあるが、ここでは前節に続いて宗像神社辺津宮あるいは神湊から車で勝浦、津屋崎、宮地などドライブしながらの名所・旧跡めぐりをイメージし紹介する。

国道495号を宗像市の方向から南下すれば福津市の津屋崎地区に向かい、その途中の勝浦に、一章4節に紹介した宗像大社の世界遺産のサイト「新原・奴山古墳群」⑦がある。あんずの里や若宮神社の楠を目印に進むと練原(ねりはら)交差点となり、そこを左折して県道528号に入り、800mほど進むと古墳群の展望所がある。その展望所から古墳群が全貌でき、定期的に常駐するガイドから説明を聞いた上で個別の古墳群の間の道を縫って散策すると分りやすい。

なお、津屋崎の丘陵部には、新原・奴山古墳群以外にも多くの古墳が密集している(津屋崎古墳群)。これまでに円墳と前方後円墳合わせて56基が確認され、その多くが玄界灘で活躍した宗像一族に関わるものの、安曇族など他の部族も含まれるとも考えられる。

〈勝山、津屋崎の塩田跡〉

その後再び国道へ戻り、そのまま交差点を玄界灘方向に直進すれば県道502号となる。それを海岸に沿って南下すると豊かな海岸地域の景観を楽しみながらのドライブで、途中から奴山川に沿うが、一帯はいわゆる勝浦干潟、津屋崎干潟④で、江戸時代から明治時代にかけて塩田が盛んであったところである。1668年に勝浦塩浜で、1743年に津屋崎塩浜で製塩が始まり、最盛期には筑前における製塩の大半を占めるほどが生産された。そうした塩田があった証が幾つか残されている。

1つは国道495号のさらに海側の松原に沿って県道502号があるが、これを新原奴山古墳から奴山川沿いに津屋崎方面に下ると、新町バス停からすぐのところに川がほ



勝浦塩浜の水路(google map)

專業者は百余戸に及んだとのことである。

そして、集落内の道をそのまま津屋崎に向かえば県道502号に合流し、その道を少し入り海側の方向に戻ると弁財天社の鳥居と祠があり、そのすぐ横の空き地の隅にかつての塩倉庫(レンガ造りで、旧熊本塩務局津屋崎出張所付属文書庫)を見ることが出来る。

b 津屋崎千軒のまち

福津市津屋崎4丁目に至り、そのエリアおよび隣接地で、漁港の方向に進めば、そこから国道495号までの東西を結ぶ一帯がかつて津屋崎千軒と呼ばれた地区である。図13に示す津屋崎橋から海岸線に平行するように囲む点線楕円の区域である。

明治時代に津屋崎村が成立した頃の状況を見ると、波折(なみおり)神社を含んで入江に沿ったところが漁業中心の浦で「北」と呼ぶ区域があり、県道502号沿いが農業を主にする「岡」で、その宮地嶽神社よりは「天神」と称し農業や工房などが入り混じる区域であった。また、これら3者でコの字型に囲まれ、図で藍の家などを含む海よりの中央部分が商店や宿屋などが集積した新町と呼ぶ家屋密集区域であった。

こうしたまちの区分は、毎年、7月に行われる波折神社の祇園祭の山笠に受け継がれ、3流れに分かれて3つの山笠が担がれている。規模は異なるが博多の祇園山笠に似た仕組みである。

津屋崎の繁栄を支えたのは、「五十集(いさば)船」と呼ばれた五十〜百石程度の荷を運ぶ船であった。天然の良港である津屋崎の港を拠点に、勝浦塩田、津屋崎塩田の塩などを西日本の各地に運ぶとともに、帰り荷として海産物や衣類、薬、たばこなどがもたらされた。



⑬ 津屋崎橋からかつての内海、塩田方向を眺める



図13 宮地嶽神社、津屋崎千軒地区

すなわち、明治の町村施行前は、入江を挟んで現在の渡地区と津屋崎地区は別々の村であった。そのうちの津屋崎村に該当する区域に港があり、あるいは沢山の家屋が並び栄えた(図13の点線枠とその周囲)。地図を見ると、入り組んだ不規則な細街路が今なお残り、そうした区域が該当する。中には、建物と建物の間が幅約1mと狭い生活路も見られ、これをスアイまたはヒアと呼んだ。

しかし、江戸時代にまちはしばしば火災にあい、大半が焼失した。このため、江戸時代の建物はいまでは見当たらない。明治、大正時代の建物として、豊村酒造およびかつての染物屋が並び、それらが津屋崎千軒の様子をいまに伝える代表的な建物である。あるいは、周辺の路地⑭が津屋崎千軒の趣を醸し出し、2006年に水産庁の“未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選”に選ばれている。

宮地嶽神社

あるいは、津屋崎千軒の区域から少し離れるが、前述したように、津屋崎小学校内で、校舎建て替えに際しみつかった唐房跡は12世紀の日宋貿易でわが国にやってきた中国人が住んでいたところで、多くの遺品が出土した。それが学校内の在自(あらじ)唐房跡展示館である。

これほどに栄えた津屋崎のまちであるものの、今日では衰退しつつある。その原因の一つは鹿児島本線の開通である(二章2節)。1890年に博多〜赤間、1891年に門司〜熊本の間が開通し、海から陸上へと交通の主体が移行したことである。そして、一つは明治時代末期に塩が専売制度に移行し、塩田が廃止されたことにある。

他にも、路地を巡ると地蔵堂、絵馬がかかる大師堂などがみられる。

あるいは、津屋崎千軒の区域から少し離れるが、前述したように、津屋崎小学校内で、校舎建て替えに際しみつかった唐房跡は12世紀の日宋貿易でわが国にやってきた中国人が住んでいたところで、多くの遺品が出土した。それが学校内の在自(あらじ)唐房跡展示館である。

これほどに栄えた津屋崎のまちであるものの、今日では衰退しつつある。その原因の一つは鹿児島本線の開通である(二章2節)。1890年に博多〜赤間、1891年に門司〜熊本の間が開通し、海から陸上へと交通の主体が移行したことである。そして、一つは明治時代末期に塩が専売制度に移行し、塩田が廃止されたことにある。

「豊村酒造」⑭は、新宮にあった造り酒屋から分家して、初代の豊村喜三郎が1874年(明治7年)に建てたものである。写真に見るように、2階の軒先中央には造り酒屋として新酒ができたことを表す杉玉(酒林ともいう)が吊るされ、その周りの壁には鍔絵で龍が描かれている。中に入ると、大きな塩木の松の木の梁があり、高い天井を一本の木を曲がったそのままに活かして上手に組み立て、艶光りするほどに見事に磨き上げられ、それらと漆喰の白壁のコントラストに驚くことだろう。会社のパンフの表現をかりれば、まさに“見得の梁”⑭である。それを見上げてつづつ酒造業に励み、代々受け継がれている。

豊村酒造の隣は「津屋崎千軒民俗館「藍の家」⑮である。1901年(明治34年)建築の染物屋の木造2階建ての典型的な町屋である。現在は福津市に寄贈され、主屋および井戸屋形が国の有形文化財に指定されている。梁は前者と同様に海水に付けた塩木であり、三和土(たたき)の広い土間がある(一口メモ(11)参照)。2階の外壁の両サイドにうだつ(袖壁のこと)があがるとともに、雨戸は外側に漆喰を塗り付け、防火壁をなす工夫がある。

周辺をぶらつくと、豊村酒造の前の小路は千軒通りと呼ばれ、一昔前の面影を残す町並みだが、それをさらに進めば右手の幼稚園の奥に波折(なみおり)宮⑯がある。これは河原崎宮之本にあったものを1221年に移した神社であるとの説明書きがある。あるいは、3人の漁師が釣に出ていた時、大風荒波にあい、三祭神(瀬織津、住吉、志賀の大神)に助けられたが、気が付けば船に3個の石が残されており、それをもち帰り祭ったとも記されている。いずれが真実かはわからないが、地区の氏神であることは間違いない。

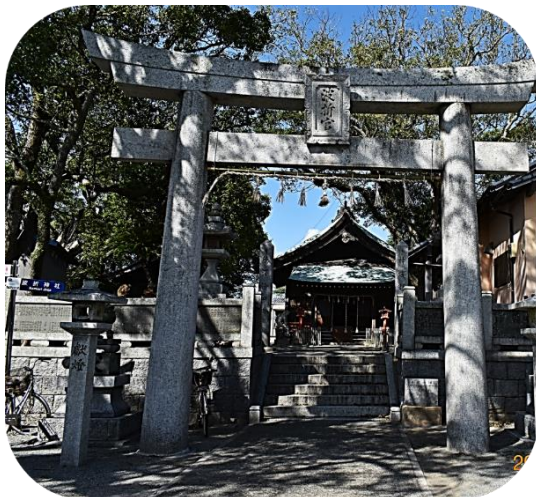
津屋崎のまちから、国道495号あるいは県道502号をつたって南に進み、福岡駅よりある宮司地区に至れば、日本一の大注連縄（重さ5トン、長さ13.5m、直径2.5m、毎年架け替えられる）で有名な「宮地嶽神社」④⑦1が鎮座している。祭神は



④④ 豊村酒造とその土間の天井の見得の梁



④⑤ 藍の家（かつての染物屋）とその内部



④⑥ 津屋崎千軒の港町を偲ぶことができる波折神社と周辺の路地（千軒通り）

その魅力に惹かれて、九州全体で人口減が進む中、福岡都市圏で東の福津、西の糸島と呼ばれるほどに依然として人々の転入があり、人口が増え続けている。本殿に参拝の後、神社の裏手に回って自在山（あらじやま）方向に進むと「奥の宮八

息長足比売命（おきながたらしひめのみこと、神功皇后）と二柱の從神（勝村大神、勝頼大神）であり、商売繁盛、交通安全、家内安全の神として崇められている。

神社の参道の先に階段があり、それを登ったところで振り返ると、参道を宮地浜海水浴場まで一直線に見下ろす道の光景に感動する。しかも、毎年2月と10月の2回は夕日がその線上で沈み、これがある航空会社のコマースヤルで有名になり、今では「光の道」（④⑦2）と呼ばれている。時期になると夕陽を見るために一大イベントのように多くの人々が集まるが、最近では

一口メモ (11) 三和土（たたき）について

三和土と書いて“たたき”と読む。これは赤土と砂の山土（花崗岩、安山岩などが風化したケイ酸に含む）に、消石灰、水を加えて練ったもので、3種類の材料を用いること、および練ったものを木製の棒で何度もたたき固めることによる呼称である。通常は建物の玄関を入ったところの土間にもちいられ、約10cmの厚さで固めて造られることが多かった。

しかし、最近では土の代わりにコンクリートやモルタル、金鏝で仕上げるのがほとんどであり、タイルを用いることもあるが、それをそのまま“たたき”と呼んでいる。本文の藍の家の土間は、当然ながら前者の三和土であり、“漆喰たたき”ともいう。

社」と総称する八つの神社がある。その一つ一つをお参りすれば悲願が成就するとのことだが、その中の一つの不動神社は、6世紀後半の宮地嶽古墳^④である。古墳時代末の



④-1 宮地嶽神社の拝殿と注連縄



④-2 宮地嶽神社の楼門と宮地浜へ一直線の参道道「光の道」

そこからの眺めは、津屋崎海水浴場、宮地浜海水浴場、福岡海岸、さらに隣接して古賀市、新宮町へと10kmに及んで大きな弧を描く砂浜と松原が続く海浜である。

福津地区の締めくくりは、神社と一直線に光の道で繋がる宮地

浜^④に行くことである。全長1.3kmで、歩いて15分程度。

d 10kmにおよぶ福津海岸

ここも宮地嶽神社の境内だが、九州各地および富山県から移築した“くど造り”や二棟造りなどとタイプが異なる茅葺の古い民家が並んでいる。

奥之宮が並ぶ山斜面に隣接する谷沿いに民家村自然広苑がある。有力者と考えられ、それには2つの説がある。石室に用いた石が、光の道をそのまま伸ばした先の相島（粕屋郡新宮町）産で、そこから運んだのではとの推測から、島に住んでいた海人族・安曇族の有力者との説がある。今一つは、埋葬品の豪華さから、2頁あるいは5頁の一口メモ（1）、（3）で紹介した天皇家の外戚である胸形君徳善でないかとの説だが、時代がずれる点で疑問とされている。



④ 奥之宮の不動神社とその背後の宮地嶽円墳

円墳（直径34m）で、その横穴式石室の長さは22mとわが国最大ではともいわれるほどだが、その入り口にあるのが不動神社である。石室からの副葬品のうち、豪華な金銅荘頭椎大刀や長方形緑瑠璃板などの20品目が国宝に指定され、九州国立博物館に寄託されている。これらから、被葬者は相当の有力者と考えられる。



④ 福津海岸（津屋崎、宮地浜、福間の海水浴場と続く）

表 11 福津市の特産品（5）

地域	品名	取扱店	住所	電話
（食 品）			福津市	
勝浦	トマトドレッシング	あんずの里市	勝浦1667-1	0940-52-5995
勝浦	あんずドレッシング	〃	〃	〃
勝浦	あんずジャム	〃	〃	〃
勝浦	津屋崎の紫芋饅頭	〃	〃	〃
勝浦	あまおういちごドレッシング	〃	〃	〃
勝浦	あんずサイダー	〃	〃	〃
勝浦	あんず最中	〃	〃	〃
勝浦	あんずでボン酢	〃	〃	〃
勝浦	あちゃら漬	〃	〃	〃
津屋崎	蔵の鯛茶漬け	ギャラリー蔵	津屋崎3-26-21	0940-52-0407
津屋崎	津屋崎千軒クッキー	パデイスリーエトワール	津屋崎3-11-17	0940-52-5292
津屋崎	清酒 豊盛大吟醸・純米酒・	豊村酒造（有）	津屋崎4-14-18	0940-52-0001
宮司	美味塩っ胡・美味燻っ胡	塩工房野次馬	宮司ヶ丘14-6	0940-52-4450
宮司	おいしいハーブ塩	〃	〃	〃
宮地嶽	宮地嶽の松ヶ枝餅	宮地嶽門前町の各店		0940-52-0204
	まるごとにくに餃子	有限会社山八	中央4-19-15	0120-583-888
	黒豚生餃子	〃	〃	〃
	山八餃子	〃	〃	〃
畦町	米粉ふくつつ粉	くわの農園	本木1074	090-9471-3263
花見が丘	きっずベジ野菜ソーセージ	農園野菜と大地の恵み	となりのグリル	0940-72-4200
			花見が浜2-7-13	
花見が丘	粗挽きのゆず胡椒	居食屋 一栄	花見が浜1-3-7	0940-42-6280
	カリフラワー	（地域振興課商工振興係）		0940-62-5014
	ミニトマト	〃		〃
	早生キャベツ	〃		〃
（工芸品）				
津屋崎	津屋崎人形	筑前津屋崎人形巧房	津屋崎3丁目14-3	0940-52-0419
宮司	マルティグラス	（有）マルティグラス	宮司3丁目18-2	0940-34-5370
宮地嶽	福珠のモマ	宮地嶽神社境内	宮司元町7-1	0940-42-0315
手光	ふくこいねこ	陶芸工房 夢かしこ	手光1276	0940-42-0498

とに興味がそそられる。

● 特産品につ

いて

福津市には農水産品の直売所が3か所ある。新鮮な地場産売り物である。

○あんずの里市（福津市勝浦1667-1、TEL0940-52-5995）

―農水産物中心の直売所。

○ふれあい広場ふくま（上西郷539-1、TEL0940-43-7790）

―福岡の野菜、果物、手作り農産加工品などの直販施設。

○お魚センタ―うみがめ（津屋崎4丁目47-18、TEL0940-52-1939）

―津屋崎漁港で水揚げされた近海の魚介類や加工品、農産物。

あるいは、市商工会、JA、漁協などが連携して福津の生鮮品、加工品、工芸品など

で優れたものなどを福津ブランド「福津の極み」と認定し、直売所や土産物店、飲食店などで販売している。表11はその一覧だが、これら以外にも思わぬ郷土料理やくつろげる店があり、それらを探すのもたのしみである。

九州風景街道のガイドブック一覧

List of Guidebook of Scenic Byway Kyushu

<http://www.qsr.mlit.go.jp/n-michi/fukeikaido/guidebook.html>

(上記のホームページからコピーできます。(無料))

全体編 ○Japanese Edition: 九州の風景街道 その1 総論

○English Edition : Scenic Byway Kyushu Part 1 Overview

その2 ルート別ガイド

日南海岸きらめきライン
日豊海岸シーニック・バイウェイ
ながさきサンセットロード
北九州おもてなし“ゆっくりかいどう”
ちょっとよりみち唐津街道むなかた
かごしま風景街道
玄界灘風景街道
九州横断の道やまなみハイウェイ
九州横断の道阿蘇くまもと路
豊の国歴史ロマン街道
みどりの里・耳納風景街道
別府湾岸・国東半島海への道
あまくさ風景街道
薩摩よりみち風景街道
島原半島うみやま街道

Part2 Leaflet by Route

Q-① Nichinan Sparkling Coast
Q-② Nippo Seashore Road
Q-③ Nagasaki Sunset Highway
Q-④ Kitakyushu Hospitality Roads
Q-⑤ Munakata Historic Byway
Q-⑥ Kagoshima Scenic Byways
Q-⑦ Genkai Coastal Highway
Q-⑧ Yamanami Highland Parkway
Q-⑨ Aso/Kumamoto Scenic Roads
Q-⑩ Toyonokuni History Roads
Q-⑪ Green Village in Minou Mountains
Q-⑫ Scenic Area of Beppu Bay and Kunisaki Pen.
Q-⑬ Amakusa Islands Drive
Q-⑭ North Satsuma Scenic Tour
Q-⑮ Umi-Yama Scenic Byway in Shimabara Pen.



九州風景街道ガイドブック

人のくに、美のくに九州 Q-⑤ ちょっとよりみち唐津街道むなかた

令和 3年1月7日 初版

日本風景街道九州ガイドブック編集委員会

樗木武、堤昌文、玉川孝道、吉武哲信、榊谷秀秋

唐津街道むなかた担当(文責) 堤昌文、樗木(ちしゃき)武

協力: ちょっとよりみち唐津街道むなかた推進協議会

発行 九州風景街道推進会議

風景街道推進会議事務局(九州地方整備局道路管理課内)

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。